42146
教科書文庫
4
810
42-1917
20000
50950

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

375.9
Mi20
資料室

広島大学
教
50950
図書

資料室
375.9
M120

高等女學校國語科教科書
文部省檢定濟
大正六年二月二十日

# 大正女學讀本

實科四箇年用

三矢重松
畠山健
峯間信吉
共編

東京
弘道館藏版

# 大正女學讀本 實科四箇年用 卷五

## 目次


一　昭憲皇太后の御盛德……三　上參次……一
二　桃の嫩葉……上杉治憲……六
　文法　形容詞の法
三　貸借の文（書牘文）……一〇
四　京の山水……藤岡作太郎……一三
　文法　助動詞の法
五　奈良（韻文）……一六
　那智の瀧を見る……橘南谿……一九

六　繪端書帖……佐々醒雪……三
文法　用言と助詞との接續　やか
七　我が國民と自然その一（口語文）……芳賀矢一……二六
八　我が國民と自然その二（口語文）……芳賀矢一……三三
文法　用言と助詞との接續　なな　そ
室内裝飾……下田歌子……三九
九　德川光友の室…………四二
文法　用言と助詞との接續　つゝ　ながら
一〇　依賴の文（書牘文）……黑板勝美……四七
一一　ナポリの風光……吉田彌平……五〇
一二　空中飛行機……吉田彌平……五四
文法　用言と助詞との接續　ば　とも　ど　ども



一三　草取……德富健次郎……六四
文法　用言と助詞との接續　を　に　も　が
科學者キューリ夫人……六八
一四　富士の道芝（上）……嘉納須磨子……七二
一五　富士の道芝（下）……嘉納須磨子……七六
文法　動詞の第一段に續く助動詞
一六　人の新盆に（書牘文）（木版）……樋口一葉……八一
一七　外國貿易……八四
文法　動詞の第二段に續く助動詞
爲替と手形……八九
一八　夏の樂み……貝原益軒……九二
一九　鎌倉の海……大和田建樹……九四

文法 動詞の第三段に續く助動詞
同 第四段に續く助動詞

二〇 舟路（韻文）……島崎藤村……一〇二

二一 露國雜記……鎌田榮吉……一〇四

文法 動詞の第五段に續く助動詞
助動詞相互の關係

活版……芳賀矢一……一一四

二二 稅所敦子君の棺前に誄す……高崎正風……一一八

文法 品詞の相轉

二三 國體の精華……佐々木高行……一二五

文法 語の構成 疊語・熟語・接頭語・接尾語

附錄 文法一覽表

# 大正女學讀本

實科四箇年用 卷五

## 一 昭憲皇太后の御盛德

三 上參次*

*姫路の人、文學博士、東京帝國大學教授、國史家。

恐—畏

かけまくもかしこき昭憲皇太后の聰明仁慈にわたらせ給ひし御事は、先帝乾剛の御德のきはまりなきとともに、國民のひとしく仰ぎ奉れるところなれば、今更事々しく記し奉らんこと、なかなかに恐多き心地すれど、こゝに聊か坤柔の御德の一斑をかゝげて、世のなべての女性と諸共に御美德の程をたゝへ奉らんとす。

皇太后には夙に教育の事業に御心を注がせ給ひ、華族女

學校を設けて華胄の女子の德性涵養を計りたまひ、また
しば〳〵同校に行啓遊ばされ、親しく教授のありさまを
見そなはし給ひ、女子高等師範學校・女子職業學校等に行
啓あそばされしこともまた一再に止らず。或は教育費
として御思召の御下賜金あり、或は學事奬勵のありがた
き御令旨を賜ふなど、女子教育の隆盛を期せしめ給ふこ
と誠にかしこき極みになんありける。女學校の式日に、
愛らしき生徒が一齊に「金剛石も磨かずば」の御歌を唱へ
出づるを聞くものは、誰かは皇太后奬學の懿旨を感佩せ
ざらん。
皇太后には又、宮人とともに蠶を養はせ給ひて、この國益

臨―望
誠―誠

多き産業を勸めさせ給ひ、或は御親ら赤十字社の事業を
督し給ひ、尊き御身をも厭はせられず親しく病院に臨ま
せられて、病苦に惱めるものを慰藉し給ふ。
加之、露國との戰始りてよりは、出征將士の上を思しやり
給ふ事深く、繃帶の御製造に、傷病兵の御慰問に、日夜御心
身を勞せさせ給ひし御事、かしこしともかしこきに、我が
將士は固より言ふに及ばず、捕虜となれる敵國の將士に
さへ義手・義足の御下賜ありけるなど承るに至りては、誰
かは至仁海の如き御德に感激し奉らざらん、誰かは至慈
内外の民草を子育し給ふ御なさけを慕ひ奉らざらん。
又、皇太后には文學の御嗜深くわたらせ給ひ、折にふれさ

せられての御歌など、誠にめでたくうるはしくして、斯道の博士達も常に驚嘆し奉る所なりと承る。殊に畏しと見奉りしは、皇太后にはよろづに御心を用ひさせ給ふこと深く、内外に對せさせ給ひての御もてなしなど、常にうるはしくわたらせ給ひ、内助の御績に至りては、又奉るべき感嘆の言の葉もなきほどなりとの御事になん。

實に昭憲皇太后にはたぐひ稀なる御美德を備へさせ給ひしなり。今こゝに記し奉れるは、もとよりそのかたはしに過ぎざるに、幡梭(一)皇后の蠶を養ひ給へる、承和の藤(二)皇后の母儀の則となり給へる、さては檀林(三)皇后の學館院・天長の王(四)皇后の濟治院の事など、歴史に見えたる代々の椒房のよき事の多く聯想せらるゝも亦畏からずや。

あゝ、皇太后には常に婦女子の爲に尊き儀範を垂れさせ給ひ、ありがたき光明を示させ給ひしに、悲しきかな、先帝の陵土未だ乾きもあへぬ大正三年の春四月、溘然として崩御ましまし ぬ。尊きその御姿は再び仰ぎ奉るに由なしと雖も、遺し給ひし玉の御聲は萬世までも天下婦人の法となり、露し給ひし露の御惠は内外の蒼生にかゝらぬ隈もなし。大日本帝國の婦人たるもの、いかで大御心の程を體し奉り、身を修め、家を齊へ、いやましに此の國を榮えしめんとの覺悟なくしてあるべき。（「家政講義」による）

(一) 雄略帝の皇后幡梭媛
(二) 仁明帝の皇后藤原順子
(三) 嵯峨帝の皇后橘嘉智子
(四) 淳和帝の皇后正子内親王

績―蹟

昭憲皇太后御歌

ひとりのみ思ふ心の善しあしも
てらし別くらん、天地の神。

## 二　桃の嫩葉

上杉治憲

女子は我が家を出でて夫の家を家とし、我が父母を離れて夫の父母を父母とするものにて、孝貞の二つこそ婦道の第一なれ。孝とは舅姑に事へて敬愛をつくすをいひ、貞とは夫に事へて節操を正しくするをいふ。「孝子深愛の心あれば必ず和氣あり。和氣あれば必ず愉色あり。愉色あれば必ず婉容あり。」舅姑をいとほしく大切に思ふ心深ければ、相對したるとき自然と氣和して違ひ戻ることなきものなり。其の氣和げば自ら顏もにこやかになり、顏色にこやかなれば自ら身の起居振舞もしとやかにして、能く物に順ひて逆ふことなきものなり。

されどこれらの事、眞實より出づるにあらずしては、こしらへものにて、一朝一夕は飾り得ても、遂にはその僞あらはれて、舅姑にも見限らるゝぞかし。若し眞實の誠だにあらば、當時行き屆かぬことありとも、いつしか其の誠顯れて、舅姑をも感ぜしむべきなり。「聲なきに聽き、形なきに視る。」といふ。誠よりするにあらずしては何ぞかくの如くなるを得ん。女は、人に適きては、終身我が父母に

(一) 米澤藩主、號は鷹山、好學勸業、明君の聞高し、文政五年卒す、年七十二。

(二) 禮記に出づ。

愉―愈

* 莊子に出づ。

事ふるものにあらざるを、人情として我が父母のみ慕はしく思ひ、又生るゝより見習ひたれば、生家の事のみ善しと心得る故、舅・姑・夫への事へ方も疎かになり、家事も生家の風にのみなしたくなるより、人々の心にも違ふやうになるなり。已にその家に嫁する上は、何事も舅・姑・夫の命を承りて、その家風に從ふべきなり。かく言へば、女子は我が父母に孝を盡すことはならぬやうなれども、さにはあらず。他門に嫁して舅姑に善く仕へ、夫婦の間も睦ましく、子孫繁榮するを見ば、我が父母の心にては如何ばかりか嬉しからん。孝は父母の心を悅ばしめ、安んぜしむるに如くことやはある。我が父母の嬉しく安んじ給ふ

やうに、舅・姑・夫に事ふること、是卽ち我が父母に孝を盡すなり。

（桃*の嫩葉）

*文化五年公が手記して孫女に贈られたるもの。

物毎にくやしくもあるかかぞいろの
いさめし頃は思ひしらずて

（三條實枝）

〔文法〕形容詞も亦動詞に準じて直說（連用・終止・連體）・前提の諸法あり。

孝貞の心　深くば……假定前提法
孝貞の心　深く　厚し。……連用
孝貞の心　深し。……終止　直說法
孝貞の心　深き人。……連體
孝貞の心　深ければ……確定前提法

命令法は動詞ありの助に依りて深かれとやうに用ふ。

## 三　貸借の文

人に物品を貸與し、又人より物品を借用して、相互に不便を助け合ふは、平生親しく交際する間柄にて屢起ることなり。かゝる時、借る方よりは眞情を吐露して、借用の目的・返却の期日等を述ぶるをよしとす。如何に親密なる間柄なりとも決して强迫・不遜に渉るが如き詞遣あるべからず、鄭重懇切に詞を卑くして依賴すべし。

又請に應ずる方は快く承諾して、いさゝかも愛惜の氣味あるべからず。若し餘儀なくて斷らざるべからざる場合には、つぶさに其の理由を述べて、假にも先方の感情を害せざる樣注意すべし。惣じて貸借の文は雙方共に隔意なく眞情の溢るゝやうにあるべきことなり。



書物を借りに遣はす文

昨日は久し振にて參上致し、いろ〳〵と積る御話承り、殊に種々御手厚き御もてなしに預り有がたく御禮申上げ參らせ候。其の節拜見致候家政學につき、猶少々取調べ申したき事柄これあり候間、恐入候へども兩三日間御貸與願はるまじく候や、御許し下され候はばかたじけなく存候。かしこ。

同返事

御文拜見仕候。昨日は折角の御入來に御座候處、何の風情もこれなく、御匆々申上げ候だん御許し下されたく候。さて御申越しの家政學は、手前方にては當分不用のものに候まゝ、ゆる〳〵御とめおき御覽下さるべく候。幾分なりとも御參考に相成候はば、うれしく存上げ參らせ候。かしこ。（*女子消息帖）

器物を借りに遣はす文

かね〳〵御心配頂き候母の病氣、やう〳〵快く相成候に付、明日床上げのまね事致し、御見舞をたまはり候方々へ心祝の赤飯差上度存候處、まことに御恥かしき次第なが

*風館編、阪正臣書、女子手蹟練習用書翰文。



ら重の用意これなく、甚だ困入候。ついては御重ならびに御袱紗、明一日だけ拜借願はるまじくや、日頃の御懇意に甘えあつかましくも御願申上候。御聞きずみ下され候はばこの上もなき幸に候。かしこ。（(一)女子消息文例）

## 四　京の山水

藤岡作太郎(二)

山紫水明の語はよく京都の景色を言ひ表せり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは水蒸氣の然らしむるなるを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分を含むこと殊に濃なる京都の朝な夕なの、いかに變化に富めるかは說明を須ひずして明らかなるべし。

(一)小山左文二編、西脇吳石書、松邑三松堂發行。

(二)加賀の人、文學博士、東圃と號す、明治四十三年歿す、年四十。

嘗＝甞

暗＝闇

*蒲團著て寢たる姿や東山。（嵐雪）

嘗て一夏を北陸の海岸に送りしことあり。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、浪俄に高く、黑雲奔りて怪魔の如く、見るがうちに重なり〳〵て海を覆ふ。波の音は雲の中にあり、電光閃々磨る墨の雲間に火花を散す。波か雷か、世界はたゞ一暗黑の中に沒し去るかと疑はれて凄じかりき。かくの如く壯絶なる景は、我が數年の滯留中、遂に京都にては見ることを得ざりき。

されど下京より吉田に通ひし程の朝な〳〵の景色は、今も恍惚として眼前に在るを覺ゆ。ひき渡す霞に三條の大橋の擬寶珠の一つ〳〵彼方へ〳〵と薄くなりて、向ふに*寢たる東山は有るか無きかの夢よりいまだ覺めやら



聲＝声

科＝料

ず、吉田の岡にならび立てる松は墨繪の刷毛の濃く薄く、花賣る處女の姿は隱れて聲ぞまづ朝靄を漏れ來る。時雨の景色またよその國には見られぬ樣なり。愛宕の峯を覆ひて、白く光りたる薄布の「さては時雨」と思ふうちに、はら〳〵と面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りする

大原女

なるべし。かゝるやさしき景色は山河襟帶の平安京の特色なり。（*國文學全史）

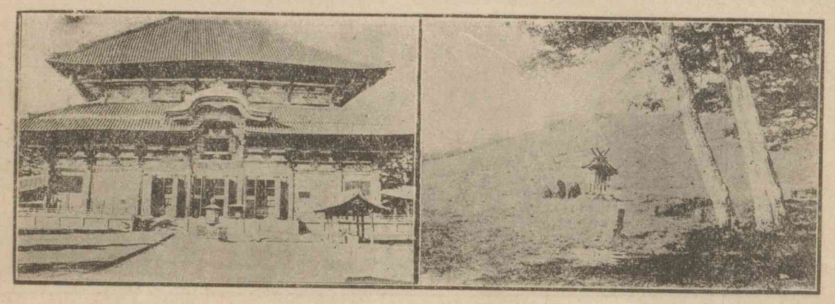
*藤岡作太郎著、平安朝時代の文學を細説したるもの。開成館發行。

〔文法〕助動詞もまた動詞・形容詞の如き諸法あり。されど多くは不完全にして、らる　さす　ぬ　たりの如く具備したるは少なし。

夢覺めなば　起き出でん。……假定前提法
夢覺めにけり。……連用
夢覺めぬ。……終止　直說法
夢覺めぬる　夜半……連體
夢覺めぬれば　起き出でぬ……確定前提法
夢　早く覺めぬ。……命令法

## 五　奈良





嫩草山　　大佛殿

*芭蕉の句

一

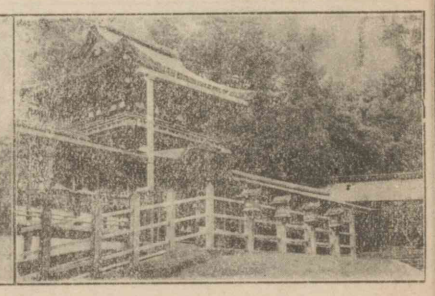
嫩草山も　春日野も
霞こめたる　春景色、
古き都の　名殘とて、
花は昔の　色に咲く。
古人曰へらく　「*奈良七代、
七堂伽藍、　八重櫻。」

二

大佛殿に　佛燈の
光は今も　かゞやきて、
正倉院は　天平の

(一)蕪村の句

(三)蕪村の句



春日神社

猿澤池

昔を固く　封じたり。
古人曰へらく　「(二)蟲干や、
甥の僧訪ふ　東大寺。」

三

鹿の鳴く音に　誘はれて、
三笠の山を　離れけん、
滿月はやく　猿澤の
池の水の面に　浮びたり。
古人曰へらく、　「(三)仲麻呂の
魂祭せん、　今日の月。」

四



(一)凡童の句

(二)伊勢の人、醫、京に住す、遨遊を好み、足跡天下に遍し、文化二年歿す。

たゝずまひ

佐保の川原は　水あせて、
石にさゝやく　音しづか。
かへりみすれば、　葛城の
山のいたゞき　雪白し。
古人曰へらく、　「(一)大佛を
見かけて遠き　冬野かな。」

(高等小學讀本)

## 那智の瀧を見る

(三)橘南谿

われ年久しく那智山の瀧を見たしと心がけ居たりしが、漸く近き頃、かの地に遊びて快く一見せり。誠に天下無雙、目を驚かす瀧なり。その瀧のわたり、山のたゝずまひより、堂宇の設、樹木の生ひやうまで、他山に勝れて神仙の境界といふべし。この瀧の事は、幼きより聞き居て、かう

やうにもあるべしと思ひしに似もやらず、格別に異なり。

初に思ひ居しは、「ふところやうに山のかゝへたる處に巖石峨々と聳え、その中に大河を切りおとしたるやうに、水逆卷き落ちて、水煙一二町にも飛び散り、雨の降る如く、一山鳴り響き、その音遠く三十町五十町の處までも聞ゆべし。その瀧の全體の趣を譬へなば、力士の荒れたるが如く、怖しくて目留めて久しく見ることもなるまじ。わが如き虚弱の者は、神氣も遠々しくなるべし。」と思ひ居しに、さはなくて、瀧の全體の趣を譬へ言はば、やさしきたをやめの立てるが如きものなり。

たをやめ

瀧の落つるところは、一枚の岩にて壁をつくりたるが如き處なり。その石壁の横の廣さ五町もあり。但し遠方よりは、この石壁樹木の梢に出でて全く見ゆれども、近く寄りて瀧見るあたりにては、兩方に程よく大木の杉多くありて、石壁の横廣くは見えず。瀧は殊に天より落つる心地すれども、水の輻は殊の外に狹く、大抵幅一間ばかりに見ゆれども、廣く高きところなれば、實は二三間もあるべし。高さは直下五六十間と見ゆ。

梢（こずゑ）

上の方、暫くは水筋とほりて見ゆれども、それより下にては、石面に水碎け、色白く霧の如くに散りて、その見事なること言ひ盡すべからず。下には大石多くありて、瀧壺といふべき淵はなし。その音も格別甚だしからず。瀧近く寄りても神氣の遠々しくなるやうにはあらず。皆人の、高さは二百間、幅は三十間などいふは、仰山に實を失ひて言へるなるべし。この瀧のみに限らず、總べてのもの、賞美に過ぎて實を失ふこと多しと覺ゆ。

されど、余も京の大佛(一)を大いなりと聞き、越中の立山(二)を高しと聞き、さて始めて大佛を拜し、立山を望みたりし時は、さのみ大いなりとも高しとも思はざりしに、日を經て見る度に大きになり高くなりしが如く、この瀧も、幾度も見れば、高くも廣くもなるべきにや。瀧の幅のひろさばかりを論ぜば、大隅の國の瀧などは、それよりも廣けれども、那智は全體の奇にして美なる事、言語に絶せり。

(一) 京都方廣寺の大佛。
(二) 高さ九六八八尺

# 六　繪端書帖

佐々醒雪*

*京都の人、名は政一、文學博士、東京高等師範學校教授

麗かに長閑なる春の日は、隣の屋根に傾きたれど、なほ前栽の綠を洩れて、楓の影の明り障子に映れるもをかし。折しも訪れたりし友は、歸り去りぬ。緣側にうづくまりゐて、くり廣げたるは、我が繪端書帖なり。

あるが中に、かのかしましく持てはやされし戰役記念端書も、一ひら二ひらはあれど、五彩の色鮮に、金銀の眩ゆきなどは、いと〳〵稀にして、世の繪端書好きといふ人々の帖などに比ぶべきはえもなけれど、我には、とり〴〵に思出多く、棄て難き限りを集へたるなり。





草木の美しきは姉上ぞ送り給ひし。

今も花は好き給へりや、一莖の草花にも、人の工のえ企つまじき美しさぞこもれる。良からぬ小說などな讀み給ひそ。倦み給はん折は、花こそよなき慰めなれ。

此の夏休も花圃の世話に暮し給へ。姉より。

兄弟して養へりし花圃は、今も草花の盛りなり。姉上ぞげに花の美しさに生し立てられ給ひけん、美しうなごやかに、對ひ參らすれば、自ら春風に座すといひけん心地のみして、今も南洋に奇しく愛でたき花の數々、集へてやおはすらん。

*春風中、坐了一月。（書言故事）

竝べて、挿みたるは姉君の夫の君がすさびなり。うひう

ひしけれど、手づから描き給へる畫なるが面白し。大波の寄せては返す岩頭に立ちて、意氣昂然たるは自らの姿なるべし。

萬事御放念被下度候、昨今の境遇如此に候。未だ姉上は、彼の地に渡り給はざりし頃のなり。かゝる意氣にてこそ今日の地位をも財産をも得給ひつれ。されば、この二ひらは我が訓戒として終生の伴侶にせんとは思ふなり。

打渡す海の彼方に、富士が根聳えて、此方なるは三保の松原なるべし。親しき友の病を彼の地に養ひたるがおこせしなり。





日に〳〵快く候。この好風景如何なる藥餌も及ぶまじき心地いたし候。十月七日。

とあるは、去年の秋なりけり。其の程より、漸う快くて、近きあたりの逍遙など許されつ。月に二三度は、必ず繪端書の音信ありしが、今年の春の初なりき、白砂青松のなつかしき水彩畫に、

春立ちて歩いて見ればなほ寒き。

と發句めきたるもの書きておこせしは、いや果のなりけるよ。「春寒の氣候に風邪を得て、俄に病重くなりぬ。筆とることさへ禁ぜられたり。」と聞くに驚きて、例の好める繪葉書など買ひとゝのへて、來ん日曜こそ訪はめと期した

る程をも待たで、長き別れとなりにしなり。あはれ、この幾ひらこそ又も得がたき形見なれや。

繪端書は獨逸より流行し初めしものと聞き渡りしが、げにこそ叔父君の彼の地より送り給ひしは、美しさ類ふべくもあらず。某が高名の聖母の像を摸したるものとぞ、氣貴くしてなつかしく、威あって猛からぬは、人間のものにあらじと見ゆ。

君が亡き母上に、眉のあたりは似たらずや。

そゞろ故郷なつかしき夕に認む。

とあり。かの鬚黑き叔父上も、かゝるやさしき方の御地はおはしけるよと、父上ぞ宜給はせし。





西行の歌

父上は、繪端書を好み給はず、あまりに人々の持てはやすを益なきことに思ひ給へり。さるを、一とせ人々と吉野に花見に行き給ひて、かしこの花の寫眞版に、

誠とは、誰か思はん、獨り見て、吉野の山の春を語らば。

西行庵のほとりにて、西行の口眞似致候。眞の歌は成り難く候。

とあるぞ、唯一ひらあるなる。

一つ〳〵見もて行くほどに、その月・その折など思ひ出ては、やがて思はぬ方にのみ辿られて、繪端書帖も暫しは忘れ果てつ。夕食召せと呼ぶ聲に、ふとぞ驚きぬる。

江の島へ女の旅や、春の風。　（子規）

〔文法〕助詞　や　かは諸種の詞に添ひて疑問又は感歎を表す。其の動詞・助動詞・形容詞に添ひて文を結ぶ時は、やは第三（終止）段に、かは第四（連體）段に添ふ。

今も　花は　好き給へりや。
有りや　無しや。
有るか　無きか。

誰　何　いづれの如き疑詞の下には、かのみを用ふるを正格とす。
やかは又反語となる。

## 七　我が國民と自然　その一

芳賀矢一

*越前の人、文學博士、東京帝國大學文科大學教授、國文學者。

日本の、氣候は溫和である、山川は秀麗である、花紅葉、四季をり〳〵の風景は誠に美しい。かういふ國土の住民が現生活に執着するのは自然である。我等の前に横たはる四圍の風光はすべて笑って居る中に、住民が獨り笑はずに居られうか。現世を愛し、人生を樂しむ國民が天地・山川を愛し、自然にあこがれるのは當然である。殊に我が日本人の花鳥・風月に親しむことは、其の生活の何れの方面に於いても見られることである。

上代に於いての衣・食・住は、多くは我が國土に繁茂して居る植物界から材料を取った。「千木高知り」といふ千木も、「太敷立て」といふ宮柱も、皆木材であったことはいふまでもなく、これを括りつけるには、藤・葛を以てした。いはゆる「綱

しろたへ
あらたへ

根ゆるぐことなく」といふ綱根である。

楮衣のしろたへ、麻衣のあらたへ、之を染めるは草木の汁であった。正木・日蔭等の蔓草を取ってかつらともし、手襁ともした。梓・櫨・檀を以て弓を作り、柳・篠を以て矢をはいだ。柳は矢の木である。葉盤・葉椀は、木の葉を編んだものらしく、今の茅巻・柏餅にその名殘をとゞめて居る。到る處植物の繁茂した國土は國民に向って、衣・食・住の材料をすべてそれから供給したのである。

日本の少女の著物の模樣のはでやかなのは、西洋人の著書にも歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、なほさら是よりも綺麗である。自然に衣服にも之が染まって來た。昔のしのぶのすり衣、今の振袖模樣、つまりは同じ事である。菊や櫻や梅や牡丹を大きく染め出した縮緬其の他の友禪物、繻珍の帶から下駄の鼻緒まで、自然界の草木・花模樣で飾られてある。その色合の名稱でも、櫻色・桃色・山吹色・栗色・葡萄色・黃櫨・木蘭地・朽葉など、植物界から取った名が多い。昔の女裝束で、櫻かさね・梅かさね・山吹かさね等、かさねの色合は、つねに四季をり〳〵の花に因んであった。やさしい女流の裝束は當然ともいはうが、武士の戰爭にいで立つ甲冑裝束にも、小櫻縅・卯の花縅・澤瀉縅・齒朶革縅などがあるのは如何にも優美ではないか。

總じて我が國の鎧甲冑は、當時の平服のはでやかなのに

似合って如何にも美しいものであった。胴にも唐草を畫がいたり、裾金物にも蝶をつけたり、菊の花をつけたり、直垂の菊綴、その袖の露といふ名稱、甲冑にも杏葉とか、草摺とか、菱縫の板とか、何れもやさしい名稱である。馬の鞍にも青貝をおいて花なぞを散らしてある。銜にも葉銜がある。旗さしものにも蝶や笹龍膽や澤瀉をつける。今日の家々の紋にも桔梗・櫻・梅鉢・澤瀉・葵・牡丹・蔦・梶の葉・藤・松等の類が最も多いのも當然の結果である。

## 八　我が國民と自然　その二

我が日本人の生活がいかほど植物及び自然界に趣味を





有するかを食物の方面から見ると、春秋の彼岸の牡丹餅・お萩の名を第一として、菓子屋の目錄を一見すると、一層その多い事が分る。松風・紅梅燒・磯松風・桃山などの一般名稱はいふまでもなく、椿餅・撫子餅・鶯餅の外、植物以外の自然に取ったもので、洲濱・時雨・越の雪・落雁・鹽竈・さゞれ石等の類がある。名稱ばかりではない、形も花木に取るのが多い。干菓子は別して、松の葉や菊の花や、すべて花木の形に造るのである。魚類の料理も亦植物界・自然界とは離れぬ。さしみのつまに、鮓のつまには笹の葉を敷く。牡丹餅を贈るのには、重箱に南天の葉を敷く。これは毒を消すとか何とかいふまじなひから來たものであらうが、

雁＝厂

葉盤・葉椀の名殘もあらう。膳椀は金蒔繪で、花木の形を裝飾とする。漆器一切の美術工藝品が、草木・花鳥の繪であることは、もとよりいふまでもない。茶の湯の棗などは當然として、匙を蓮華といふなども優美である。

花木の美を愛するところから、女の名にやさしい美しい花の名をつける事が最も多い。昔から、美人と花とは何處の國の文學でも離れぬもので、花を美人に喩へ、美人を花に喩へるものであるが、日本書紀(一)・古事記(二)の歌の中にも、早く已に美人を櫻にたとへ、一本菅にたとへ、また大根に喩へてある。これは、色の白いのを言ったのであらう。

挿花の術、箱庭づくり、盆景の山水、みな我が國人獨得の伎

(一) 日本上古の歴史、(漢文)元正天皇の時、舍人親王、太安麿等の勅を奉じて撰ぶ所なり。
(二) 日本上古の歴史、元明天皇の時、太安麿の撰べるもの



倆であって、獨得の發達をして居る。花を活けるにも、これを畫がくにも、その生きたまゝにするのが美しい點である。枝をむしり取って花ばかり挿し込むのは西洋の挿花であるが、自然の枝根をそのまゝに、天地の配合よろしくあらはすのが、挿花でも、盆栽でも、日本人の長處である。日本人は眞に自然の友である。よく自然の心を解したものである。

我が國の文學に自然を吟詠したものの多いことはいふまでもない。繪畫が花鳥を以て優って居る事や、彫刻も花鳥の方が多い事や、音樂も人聲よりは自然の音色に近い事や、また宮殿の朱塗の建築も松・杉の茂った背景で一層そ

の美をなす事を考へて見れば、我が國の古來の文學が自然界をうたふのを殊に長處とし、生命として居た事が分る。上古から近世に至るまで、歌の大半は花鳥・風月の題詠であった。

日本人ほど、國民全體が詩人的なのは、恐らくは世界中にあるまい。歌心は誰にでもある。今日日本で、歌を作る人は、どの位の數であらう。宮內省の毎年の詠進は何萬といふ數である。歌を作らぬでも俳句を作る。どんな片田舍にも俳句の宗匠は居る。八百屋・魚屋は勿論、質屋でも、金貸でも、下手の横ずきは到る處に多い。神社奉納の額面は、到る處に小詩人の名を列ねて居る。短くて作り易い短詩形であるから、上手でこそなけれ、何人も作って、花見遊山の時にも一興とするのである。この花見といひ、雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、小詩人はまことに忙しいのである。惡事を働いて死刑に處せられる大惡人でも、死に臨んでは一首を口吟むといふやうなのは、恐らくは他國にはない事であらう。我が國民は、國民を擧げて抒情詩人である、叙景詩人であるといってもよろしい。

それ故、我が國民は隱居すれば盆栽いぢりをする。歌や挿花に慰安を求める。日本人が世の中を厭ふといへば風流三昧に日を送る。西洋でいふ厭世は、本當に此の世

の中が厭になるのである。日本人の厭世は唯人事社會がうるさいのである。人事社會から遠ざかって、花鳥・風月に近づけば、それでいやな思はなくなるのである。我が國民の自然に對する關係は他の國民のとは違って深遠に且重大なものがあるのである。（國民性十論）*

（文法）助詞のなは、動詞及び受身・使役・尊敬等の助動詞の第三（終止）段（ラ變のみ第四段）に添ひて禁止の意を表し、な……そは第二（連用）段の動詞（カ・サ變は第一段）を挾みて同じく禁止の意を表す。

良からぬ　小說など　な讀み給ひそ。

良からぬ　小說などを　讀み給ふな。

*博士が我が國土の形勢、外國文化の影響等に察して國民性の源泉及び將來なる論じたるもの。東京富山房發行。





# 室內裝飾

下田歌子*

*岐阜縣の人、私立實踐女學校長、元學習院女學部長。

室內裝飾は、隨分にむづかしきものなり。その裝置の仕方によりては、格別立派ならぬ建築の家も、存外に美麗に見え、また甚だ莊嚴なる構造にても、その裝飾の惡しき時はさばかり莊麗にも覺えぬものなり。要は、たゞ色と形との配合をよくして、なるべく上品に見ゆるやうにし、日本館の裝飾、西洋館の裝飾、孰れも、その家屋に適合して、愛でたからんやうにすべし。總じて有り合はせの麤末なる物品を用ひても、殊更に調進したる高價の什器よりも、良くも、麗しくも、人の見おもはんやうにするが室內裝飾の上手とはいふなり。

色と形との配合は美術上最も大切なることにて、一朝にして、十分に理解し得べきやうに陳べ盡すべくもあらずといへども、然れども、本邦人は、すべて、天禀に美術の性情に富めるを以て、他邦人のごとく、苦心して學ばざるも、自らこの眞味を解するもの多きは奇といふべし。

そも〳〵、色の配合は、近く手に取りて見る物と、遠くより望むものとは、

一樣ならざることを知るべし。而して室内裝飾は、大抵繪卷物・雙紙等の如く、眼に近づけて見るものにあらざれば、遠く望む方によりて裝置すべし。即ち黑みたる色と色とを接近せしむれば、縱令、一方は赤く、一方は紫なりとも、たゞ混沌と黑み渡りて見ゆべし。また、薄綠・薄黃の如き、押並べて遠くより見れば、同じやうに渺茫とのみ見ゆべく、赤・紅・薄紅・白などと並べ飾れば、これを望む者は、曙染のごとく覺ゆべし。これに反して、細かに種々の濃色を交へたるは、たゞごだ〳〵として、判然見分け難く、その色、存外に麗しからざるべし。室内裝飾の配合は、遠見してめでたからんことを期すべし。

さて、配合は、大抵、濃厚なる色と、淡泊なる色とを好き程に取合はすべしといへども、餘りに種々の色の入り雜りたるは惡し。且時により、處によりては、濃厚なる色のみを用ふることもあり、または、淡泊なるのみを施すこともあるべきなれども、要するに、濃厚色をのみ配合するは、むづかしきものなりと知るべし。而して、殊に最も注意すべきは色の配合は、全體の一部分、即ち一側の方三四分、某色を以て彩りたるときは、對の





一側の方に、たゞ一點にても、同じ色を施して、釣合を取るべきこと是なり。なほ色の配合の蘊奥を探らんと欲せば、宜しく世人が賞贊する名花の天然の色合、及び畫工の妙手に成りたる彩色繪を見るべし。實に、自然の美、人工の妙、能く配合の眞味を得たるものなりかし。然れども、日本畫は、多くは、廣大なる場所に遠く掲げて見るに可なるもの少くして、近く手に取りて見るによきもの多ければ、その色どりに模せんとするに當りては、これ等の點にも亦能く注意すべき事なり。

形の配合は、方形・圓形・斜形・三角形その他、長短・大小・高低等相對比して、配置の宜しきをいふなり。而して、方形の物の側には圓形のものを置き、ひらたきものの向ひには中高なる物を据ゑ、規則立ちたるには、少し不規則なるやうの形を添ふべし。即ち方形なる手箱に、紐結びて、總の打亂れかゝりたるなど、この心なり。故に一對並びたる物の傍には、くつろぎたる物をとり合はすべし。されど、長き物の次には短き物、圓き物の次には角なる物とやうに、餘り配置の方則にのみ拘泥したるも惡し。何も〳〵好き程にあるべく、又、花卉・繪畫の優れたるものの中にて、最も

よき形の配合を見合はせて、參考とすべし。彼の嵐の後の庭に、楓葉・梧桐・松葉・銀杏など、さまざまの形したるが、或るはまばらに、或るは堆く、多くも少くも、吹き寄せられ、取散されたる、まことに、眞美玄妙を集めたる天然の形體配合とぞいふべき。能く注意して見るべきことなり。

（高等女子日本讀本）

## 九　德川光友の室

### 上

長局の方俄に騷がし。「あれよ〳〵。」と叫ぶ聲、ばた〳〵走る音、徒事ならず。

夫人は居室にあり、悠然として騷がず。徐かに侍女に命じぬ。

「五條を召せ。」





老女五條は召に應じて來れり。顏色靑ざめ、呼吸せはし。

「何事ぞ。」

夫人の問と等しく、五條は早くも口を開けり。

「一大事の候。只今、中山茂兵衞、奥女中を刺殺し、血刀を提げて部屋々々を騷がし候。あれ〳〵、あのやうに騷ぎ居り候。こゝにおはしましては心元なし。はやはや御動座遊ばさるべし。」

夫人はきっと五條の顏を見遣りぬ。

「それしきの事、なに一大事と云ふべきぞ。茂兵衞は亂心せりとこそ覺ゆれ。當番の男どもやがて取鎭むべければ、構へて騷ぐべからず。そこに居よ。何の周章

つる事かある。」

夫人は端然として座をも動かず。茂兵衛は間もなく庭中の井戸に身を投じて果てけり。事乃ち已みぬ。

中

一年は夢の如くに過ぎぬ。

「去年の今日は茂兵衛の奥女中を殺しし日に候はずや。あの時の恐しさ、今に忘れ候はず。」

侍女等、お次の室に在りて、當時の事ども語り合ひけり。折柄、一天俄に搔曇れり。風捲き、雨奔り、電閃き、雷轟く、天色黯澹、晝なほ夜の如し。

侍女等は顫ひ戰きぬ、夫人は平然として常の如し。忽然として火柱立ちぬ。轟々として天地も碎けんばかりに鳴りはためきぬ。先に茂兵衛の投ぜし井戸に雷落ちけるなり。侍女等或は倒れ、或は氣絶す、夫人は自若として神色平生の如し。

下

人は投じ、雷は落つ。

「不吉の井戸は埋めんこそ好けれ。」

奥役の議は忽ちに決しぬ。

夫人は大久保金兵衛を召して諭せり。

「雷の落ちたる井戸を不祥なりとせば、此の邸、此の庭、また皆不祥として改むべき道理ならずや。井戸は底を

改—攻

浚ひ、水を替ふれば仔細なきものぞ。舊き井戸を塞ぎて新しき井戸を穿つは、人を勞するのみにて何の益もなき事ぞかし。」

金兵衞其の理に服しぬ。埋井の議乃ち已む。夫人の言ふ所理義極めて明白、人をして之を爭ふ辭なからしむ。識見雋邁なるにあらずんば能はじ。賢婦といふべし。

（報知新聞）

〔文法〕助詞のつゝ　なからは動詞（及び助動詞の一部）の第二（連用）段に添ひて、（一）下に來る動作の同時に起ること、（二）その動作の反覆、（三）下の動作と背反することを表す。

花鳥風月に　親しみつゝ　人生を　樂しむ。

我ながら　思ふに　任せず。



## 一〇　依賴の文

人に物事を依賴するは、此方の力及ばぬ爲、賴み請ひて助力を求むるなり。されば文辭・意趣共に愼重丁寧を旨とし、苟且にも傲慢にして先方に言ひ附くるが如き口振あるべからず。緣談、又は身の振方等の如き重大なる件につきての依賴は尙更のことなり。

この文を認むるには、依賴せんとする用件、それに至りたる理由、又先方の煩勞を謝する辭、及び依賴する旨を明記するを要す。さて其の返事には、依賴されたる用件の諾否につき愼重丁寧の詞を以て明確に認め送り、

決して遷延日を送るべからず。

## 裁縫を頼む

何時もさしせまり御願申上げ、相濟まぬことに候へども、娘事來ん何日、某樣より御招待相受け參上致すべき都合にて、此の一襲入用につき是非同日までに仕立てあげたく候へども、生憎このごろは來客引續き針取るひまもこれなく、困り居候。就いては、御手早の御許樣にと存じ、別紙寸法書相添へ御願申上候まゝ、御迷惑樣ながら、前日までに御仕立てあげ下されたく願上候。何も俄に着飾らせ候はでも宜しき樣に候へども、かねてより購ひおきしものとて、同じくは同日に着初致させたく、勝手のみ御願

憎—僧





申上候。御承諾下され候はば娘の喜も限りなき事に候。かしこ。（詳＊說女子書翰文）

*佐藤正範著、六盟館發行

## 養蠶の手傳を頼む

拙宅事例年の通り少々ながら、養蠶相試み候處、氣候も順當にて蠶兒の發育よろしく、この模樣にては、來る二十日頃には全部一時に上簇致すべく、人手少きため、萬一手おくれ・仕損じなどこれあり候うては殘念につき、御繰合せ、上簇の時期だけ御手傳願はるまじくや、何卒御聞入れのほど願ひあげ候。かしこ。（同上）

## 來診を頼む

拜啓、先般母事病氣の節には萬々御世話に預り有りがた

苦—若

く存上候。御蔭樣にて快方に向ひ一同喜びをり候處、昨夜より又々再發いたし候樣にて體溫三十九度七分、食事も進まず打臥しうめき居候まゝ、御宅診時間中誠に恐入候へども、本日朝の間に御來診なし下されたく、御注意の如く介抱致し、服藥も致させおき候へども、不安心につき、かくは御願ひ申上ぐる次第に候。かしこ。（同上）

*長崎縣の人、文學博士、東京帝國大學文科大學助教授

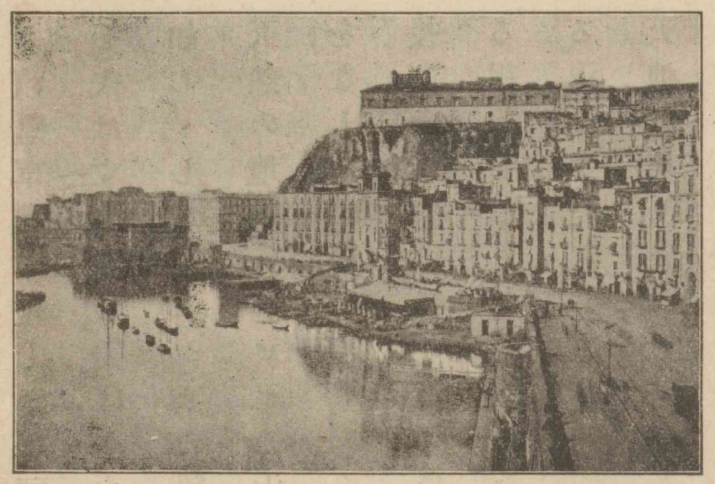
## 一一　ナポリの風光（伊太利）

*黑板勝美

「ナポリの都に遊ばば死すとも本望なり。」といふは、これ南伊太利の樂土ナポリを讃美せる語にあらずや。羅馬に古帝國の覇圖を偲び、法王宮の豪華に驚けるものは、又

騰—謄

南に下って噴煙高く蒸騰するベスビオの高峯悠然として峙つを望み、山の裾次第に廣がりて、目も遙に浪靜かなる地中海岸を平野丘陵の緣取れるあたり、山水秀麗の氣鍾りて四時花さくが如き此のナポリ市を訪はざるものはなからん。



ナポリ港

藍色の灣内には青螺點々、琅玕洞を以て名高きカプリの島、さてはイスキア・プロチダなどの小島・大島、淡靄の中に

聰一總

連なりつゝ浮べり。近くは港内深く錨を投ぜる山の如き汽船・軍艦の忙しき埠頭に鈴なりとなれるが却って調和を失はず、風光の美はます〳〵その美を發揮するものの如し。しかもナポリの絶景は實にその夕景色にあり。天然の地勢、ベスビオの山肩より西南に開けてナポリ灣をなし、その岸の岩壁赤く黄色を帯びたるに、斜陽の光を投げたる空の色と海の色との變化は殆ど筆舌の及ばざる程美しく、天火に焼けたる空の菫色と變り、血を漂はせる海はまたもとの藍色に歸りていよ〳〵青く、何時しか天地は灰色の帷帳冥合して聰しげに瞬く星の一つ二つ水天髣髴の際に宿る。想ふに此の間に變化する自然の





色は造化があらゆる色彩の微妙を傾け盡して、餘力を遺さざるものといふべし。マルドーリの丘は實にこの微妙なる造化の力を示す爲にナポリに入れる人々を待てる景勝の地なり。

余が馬車を雇ひてダラ〳〵阪を上り、こゝに着けるは午後の六時頃にもやありけん、とある寺院の庭を通り、葡萄酒藏幾棟となく連なれる間を過ぐれば、その先やがて丘の鼻となり、四方を展望すべく突出せり。高さ海拔千五百呎、灣口のゲータ島よりイスキャの島、さては遠くのポンザの島まで幾十里の間目睫の下に集り、少し下りて鋼鐵に錆をかけたる如きポッツォリ灣一帯、山水畫そのまゝに

展開するかと思へば、麓にはナポリの市、屋根といふ屋根、蜂の巣の如く重疊せり。而してアストロニー、アルベノなどの噴火山湖が一勺水の綠色を點ぜるも面白きに、夕暮告ぐる寺の鐘につれ、太陽地平線に入らんとする刹那、緋に染まれる雲の色、紫に菫に、靑に薄鼠と變り行く瞬時の光景に對し、東の方ベスビオの煤色なせる煙の天空を衝きて立昇るに、余は暫く我を忘れて、この天下の絶景に憧憬するなりき。(一)

(一)歐米十數國の風俗を觀察せる雜感を記したるもの、東京文會堂發行。

(二)歐米文明記による)

## 一二　空中飛行機

(一)吉田彌平

脚なくして千里を走る汽車、櫂なくして大海を横ぎる汽船はあまりに事ふりたり。今は我に翼なくして空中を飛行する術さへ工夫せられて、まさに其の實用盛ならんとす。人智の進歩實に驚くべきにあらずや。

それ、空飛ぶ鳥を見て、我が身の自由ならぬを憾むるは、自然の人情なり。空中飛行の工夫には、蓋し久しき以前より人類の苦心を費したるならん。その昔(一)バベルの高塔も天に昇らんとの望より起りしなり。(二)墨子の飛鳶(三)韓信の紙鳶、及び爲朝の朝(四)若丸を乘せたる紙鳶なども亦此の思想の萠芽なりけんかし。

飛行機を大別して三種とす。その一は輕氣球また約して氣球といふ、俗にいふ風船なり。その二は自動氣球に

(一)バベルはバビロンの市街、昔此に昇天臺を築かんとして果さず。

(二)支那周末の哲學者

(三)漢高祖の臣。

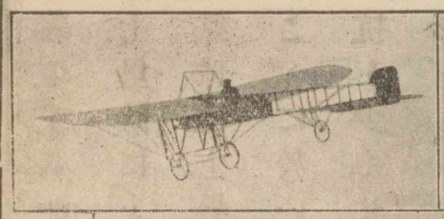
(四)爲朝の子。

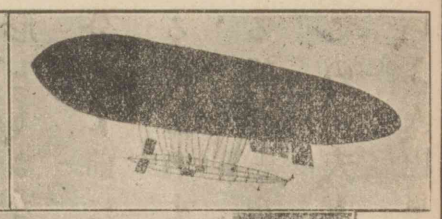
して卽ち空中船なり。或は飛行船ともいふ。その三は飛行機なり。

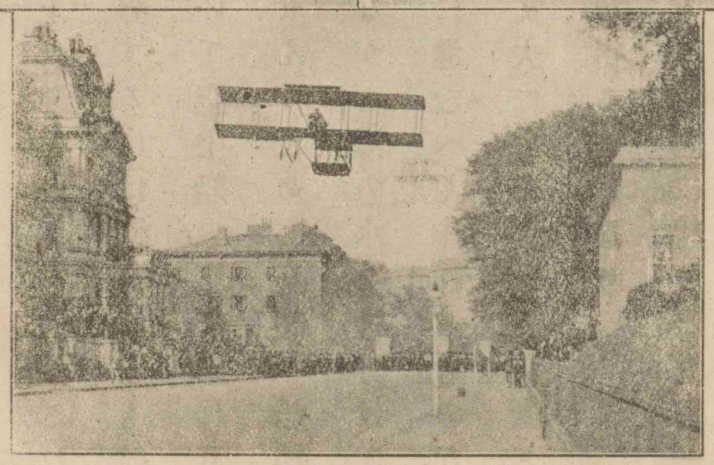
氣球はその初、煙又は熱せる空氣を充てて之を揚げたりしが、千七百七十六年水素瓦斯を發見して、之に應用してより大いに進歩し、千七百八十五年には英國のドーヴァーより西北の順風に乘じ、二時間半にて佛國カレーに到着するを得たり。これより氣球は、軍事上の偵察通信と、氣象觀測とに利用せられたり。殊に千八百七十年、普佛戰*爭に際しては、重圍の中にある巴里より七十三箇の傳令氣球を放ちたるが、返信は氣球に添へて遣はせる傳書鳩によりて首尾よく城内に致されたりとぞ。氣球に駕して最も高く昇れるは千九百一年七月獨逸人バーソンが高さ三萬五千四百呎に達せるを第一とす。かく高く昇るときは空氣中の酸素乏しくなるを以て、人造の酸素槽を携帶するを要す。氣象觀測の爲、白耳

*一八七〇年普魯西と佛蘭西との戰爭









ツヂアク式空中船

ブレリオー式單葉飛行機

ファーマン式複葉飛行機

呎一尺

抗—坑
押—狎
*巴里セーヌ河の左岸に在り、高さ九十丈。

義の或る測候所にて揚げたるものは九萬五千餘呎卽ち七里餘に上れりといふ。勿論これには人は乘らぬなり。氣球は上昇するには適すれども、航空すること能はず。こゝに於いて空中船の工夫起れり。空中船は空氣の抵抗を少くせんがために、全體を船舶又は葉卷煙草などの形とし、さながら海の水を押分けて進むが如く、空氣を押分けて前に進むべく作れるものなり。空中船に必要なるは、最も丈夫にして輕き瓦斯囊と、最も輕くして强靭なる船體とを得ることなり。

この工夫も、亦佛國に起り、千九百一年サントスデュモンといふ人、巴里にてエッフェル塔を一周したり。方今空中船に



*獨逸の將官

て最も有名なるはツェッペリン伯なり。伯は空氣の抵抗を避けんがために、十七箇の氣球をあつめて、長き煙筒形の空中船を作り、これに昇降舵と方向舵とをつけて、上下左右の運動を自在ならしめたり。獨逸政府は之を保護して專らその研究を助く。現今の記錄にて、空中船は一時間三十五哩の速力を出し、その航行範圍は百哩より千哩に達すといふ。

鳥や、蝶や、その體重は何れも空氣より重きに拘らず、なほ空氣中を飛びゆくは何ぞや。羽翼ありて運動すればなり。されば人もその體重に相當する羽翼を具へなば飛行の術も得られぬことはあらじ。これ飛行機を發明す

るに至れる所以なり。昔、希臘の或る哲學者は木にて一種の翼を作り、自ら之を動かして空中を飛べりといふ。又玩具のトンバウの理を應用し、螺旋の運動によりて上昇することを考へたる者あり。されど現今最も有望なるは靜翼飛行機なり。これは鳶・鷹などの如き、空高く舞ふ鳥は、雀・鳩などの如く屢羽ばたきすることなく、悠然として翺翔しをるより思ひつきたるものなり。かくて一方には鳶・鷹は勿論、飛魚・栗鼠・蝙蝠・蛙その他諸種の飛行動物につきて、飛行の理論を研究し、一方には之に擬して機械を工夫せり。千九百五年サンフランシスコにて試みたる單葉飛行機の飛揚は頗る喝采を博したり。これは

喝＝渇

モンゴマリー教授の工夫に出でたるものにて、マロニーといへる名人これに乘れり。初は氣球の力にて四千呎の高さに上りたるとき、マロニーは繫ぎたる綱を自ら切り放ちたれば、氣球は離れて天高く冲り、マロニーは飛行機によりて空中旅行を始めたり。マロニー手に隨って飛行機の翼を操縦すれば、飛行機は右に往き、左に返り、或は圓く、或は螺旋狀に、或は風に順ひ、或は風に逆ひ、千變萬化の祕術を盡して、縱横自在に空中をかけめぐり、二十分間に八哩を飛行して、やすゝと豫定の地點に降下したりといふ。その後マロニーは、試驗中、飛行機の故障のために命を隕したれども、モンゴマリー型の飛行機は斯界に

點＝点

一紀元を劃するものなりといふ。—かくて今日までにて、飛行機の飛*行せる最長距離は三百九十二哩、その平均速度は一時間五十哩、最高度に上れるは我が富士山の高さ、最長時間に堪へたるは十一時五十五分間なりといふ。方今空中飛行の術は研究の最中にあり、前途果して如何なる發達をなすべきか、豫め知るべからず、特に最近に於ける進歩は著しく、今は實際軍事上に利用せられて、偉大なる威力を示すあり、やがては空中船を空中戰艦・巡空艦とし、飛行機を空中水雷艇とせる空中艦隊の編成を見るにも至るならん。又現に之を交通上に應用して、飛行機郵便開始せられたれば、從って空中船飛行會社の設立を企

*飛行の記錄は時々刻々に變化して數字を增加し底止する所を知らざれど最近に於ける記錄は左の如し。
一、最長距離＝（世界）一七〇〇吉米（日本）二〇〇吉米
二、最高度＝（世界）八一五〇米（日本）三〇〇〇米
三、最速度＝（世界）一時間二〇三吉米（日本）三〇吉米
四、最長時間＝（世界）二十四時間（日本）三時間

推—堆—椎





つる者あり、或は之を極地の探險に適用せんと試むる者あり、亦快ならずや。

小技と雖も亦忍耐と工夫とを要す。（スマイルス）

必要の發明は快樂の發明よりも舊し。（シセロ）

智者は既往を推して將來を知る。（ソフォクリス）

陽氣發處、金石亦透、精神一到、何事不成。（朱子）

〔文法〕 助詞のばは動詞の第一（假定前提）段に添ひて順態假定の前提法を作る。又形容詞には第二（連用）段に動詞あらを略して添ひ、助動詞には前兩者の一に準じて添ふ。

ナポリの都に遊ばば。死すとも本望なり。

第五（確定前提）段に添ひては順態確定（或は一般）前提法を作る。

ナポリの都に遊べば。其の快限りなし。

ともは動詞の第三（終止）段に添ひて、逆態假定前提法を作る。又形

容詞には第二段にありを略して添ひ、助動詞には前兩者の一に準じて添ふ。

風は　吹くとも　燈火は　消えじ。
縱令　身は　死すとも　名譽は　盡きざるべし。

ども は動詞・形容詞・助動詞の第五（確定前提）段に添ひて逆態確定（或は一般前提）法を作る。

風は　吹かねど　花は　散る。
上昇するには　適すれども　航空すること　能はず。

## 一三　草とり

*熊本縣の人、蘆花と號す、文學者。

徳富健次郎

六・七・八・九の月は、農家は草と合戰するのである。自然主義の天は一切のものを生じ、一切の強いものを育てる。打ちやって置けば、比較的脆弱な五穀・蔬菜は野草に杜がれてしまふ。二宮尊徳の所謂「天道すべての物を生ず。制裁補導は人間の道」で、此に人間と草との戰鬪が開かれるのである。

老人・子供は固より、大抵の病人も手のあるものは、十能でも使ひたい程、畑の草取、田の草取に忙殺せられる。「草に攻められます。」と、農家の人達がいふ。草を退治するのではなくて、全く人間が草に攻められるのである。

唯二段そこらに過ぎぬ畑をもつ*美的百姓でも、夏秋は烈しく草に攻められる。起きぬけに顔も洗はず、露蹴ちらして草を取る、日の傾いた夕陰に取る、取りきれないので、日中にも取る。やっと綺麗になつたかと思ふと最早一方

*作者自ら稱する語。

では生えてゐる。「草と蟲とさへ無かったら、田園の夏は本當に好いのだが。」と、愚痴をこぼさぬことは無い。全體草などいふ餘計なものが何の爲にあるのか。我は何故草取器械にならねばならぬか。草取は愚だ。「打ちやって、草と作物との競爭をさせて全滅とも行くまいから、殘っただけを此方に貰へば濟む。」かう思うても實際眼の前に草の跋扈するを見れば取らずには居られぬ。隣の畑が綺麗なのを見れば、此方の畑を草にして草の種を隣に飛ばしても濟まぬ。近所の思はく迷惑も思はねばならぬ。そこでまた勇氣を振り起して草を取る。一本また一本、一本取れば一本減るのだ。草の種は限りなくても、取った





だけは草が減るのだ。手には畑の草を取りつゝ、心には心田の草を取る。心が畑か、畑が心か。とにかく草が生え易い。油斷をすれば、畑は草だらけである。吾儕の心も草だらけである。四圍の社會も草だらけである。吾儕は世界の草の種を取り盡すことは出來ぬ。併し打ちやって置けば吾儕は草の中に埋沒せられてしまふ。吾儕は人の爲に草を取らず己の爲に草を取るのだ。草の爲に草をとらず、生命の爲に草を取るのだ「敵國外患なければ國恆に亡ぶ」で、草がなければ農家は墮落してしまふ。わが内外の草を取らなければ、吾儕は終に平和の内に腐ってしまふ。(みゝずのたはごと)

(一)孟子に「無敵國外患者國恆亡」とあり。

(二)蘆花が東京市郊外に於ける自己の田園生活を敍したもの。

〔文法〕助詞を‖に‖も‖がは動詞・助動詞・形容詞の第四(連體)段に添ひて條件の下に起るべき事實の順適せざるを表すことあり、之を逆接といふ。

吉野の　春を　語るを‖　人は　誠とは　思はず。
苦心して　學ばざるも‖　其の　眞味を　解す。

## 科學者キュリー夫人

ラヂウムの發見者として世界に英名を馳せたるキュリー夫人スクロドウスカは、一千八百六十七年露領ポ(一)ランドに生る。父はスクロドウスキ(二)といひ、ワルシャウに於ける學校の物理學教授なりき。

夫人の幼きや、長き前垂を掛け、帚を手にし、父の實驗室に入り、あるは書物の塵を拂ひ、あるは器械の整頓をなす等なにくれとなく父の手助をするを常とせり。此の幼女は父の實驗を見まもり、其の仕事のいかに忍耐を要するものなるかを知ると同時に、瑣細と思はるゝ研究のいとも大なる結果を齎すことに興を覺ゆるなりき。

(一)一四〇〇年代に露澳普の三國に分割せられし國。
(二)舊ポーランドの首府。



かくて其の注意深き性質と精密なる頭腦とは養ひ育てられつゝ、其の科學的趣味は年と共に發達し來り、遂に自ら考案と研究とに專心しては、何事をも擲ちて顧みず、家にありては父の女たると共に其の書生たり、學校に於いては學生たると同時に教師の助手たりき。されば其の同窓の友は、女の先生」の稱を以て之を呼びたりきといふ。既にしてワルシャウの女學校を卒へて後巴里に遊學し、刻苦勉勵、其の學に熱心なること實に驚くばかりなりき。妙齡の處女の身を以て、毫も世事をかへりみず、一意專心、眞理を研究して倦むことなきを見て、教師は皆其の將來を祝しけるが、やが

キュリー氏及び夫人
(學術通俗講演集所載)

て物理學と數學との學位を得、かつ物理・化學の教授キュリーと結婚するに至れり。

爾來、夫人は精緻なる眼と倦むことなき忍耐力とを以て、想像力の豊富なる夫の缺點を補ひぬ。これより先、教授ベクェレルはウラニュムより發する光に就きて研究し、奇異なる發見をなしたりしが、キュリー夫妻はその發見に暗示せらゝて、他の物體より、なほ一層熱烈なる光を發見せられざるべきかに思ひ及びぬ。かくて夫妻は共々に諸金屬につき考案をめぐらし、幾年の長きを其の研究に費したり。

自然の秘密を闡明せんとする研究に清き快感を有する夫人は、世俗の所謂快樂を退くること既に久しく、夫と共に實驗室に籠りて、たゞ考案に餘念なし。世の俗客を遠ざけて機械と書籍とをのみ友とせる夫妻は、今更に日月の流の速なるをかこちたりき。されども夫妻は驚くべき熱心と量りがたき忍耐とをもて、鑛物の試驗に倦むことなかりしが、遂に其の研究は空しからざりき。

夫妻はボヘミア*の鑛山に於ける金屬の渣滓より化學上の鹽を取ることを得しが、この鹽こそはラヂウムとてウラニュム性の光を發し、其の熱烈なる度合は、其の幾層倍なるか測り知られざるものなりけれ。其の赫奕たる光は周圍のものをして悉く之に應感せしむ。夫人曰はく、「然り、部屋の空氣も、實驗者の衣服も、其の他の有らゆるものも光を放つに至るべし。」と。あはれ、此の神祕の力を發見したる當時の夫妻の歡喜や、そもいかなりけん。昨日まではさまで社會の注意を受けざりしキュリー夫妻は今やこの大發見を以て全世界を驚愕せしめぬ。驚くべき大發見げにこは夫妻協力の研究の結果なりけり。

精細なる觀察力もて種々なる金屬を吟味せるものは妻にして、金屬を試驗して發見を確定せるは夫なりき。もし夫妻にして其の一人を缺かんには、恐らくこの大發見はなし得られざりしならん。されば夫は其の發見の功績を妻に與へぬ、妻は其の名譽を夫にゆづりぬ。かくて夫妻の愛はいよ〳〵美しかりき。

一千九百三年、夫妻はノーブル(一)賞金を受領し、夫人はセーブル(二)の學校に教授として招聘せられぬ。如何に美しきことならずや。科學的天才

*澳地利最北の州名



圍＝囲
當＝当
屬＝属

(一)ノーベルは瑞典の人、ダイナマイトの發明者、遺言して、遺産を平和的事業に功勞ある者に贈呈することとせり
(二)佛國の都會、巴里の西南に在り。

を有する男女が、夫妻となりて協力し、こゝに痴者の空想とも思はるべき一大發見をなすに至りぬ。二人の清き靈魂の一致よ、あゝ、そは詩歌の理想鄉に於いて、(一)ブラウニング夫妻が結合せると相并びて此の世を飾る美談とこそはいふべけれ。

(後漢書)

有志者事竟成。

## 一四　富士の道芝（上）

(三)嘉納須磨子

顧みすれば、(四)寶永山は眼の下にて、返す〳〵も高う來ぬるものかな。生れてより始めて、自信を得たる心地す。日まだ高からぬに、朝風、雪をこして吹けばいと寒く、背に負へる大袋の眞綿も、さまで暖ならず、手袋しても杖もつ手は冷に、顔の艶もぬけて、肌の色黃ばみ、唇は紫だちて乾く

(一)英國の大詩人（一八一二―一八八九）妻も亦女流詩人として名高し。（一八〇六―一八六二）
(二)西洞たみの譯編、西洋婦人美談十數章を集めたるもの。內外出版協會發行。
(三)嘉納治五郎の夫人、竹添進一郎の女。
(四)富士山東面の中腹、寶永四年、同山噴火の時現出す。
(五)婦人に及せる感化

發＝発



やうに痛し。八合目まではいと易きを、こゝより絕頂までは、休らふ所も無しと云へば、緩々息ふ。人やりならぬ道なれば、行きうしとても如何でたゆたはん。やう〳〵息ぐるしさ增さるに、休らふ數こそ繁くなれど、大たるみの難所もたゆまで過ぎて、いよ〳〵胸つき八町とはなりぬ。頂を仰ぎ見ては、人々さすがに吐胸をつきぬべく、下り來る人ごとに、「お登りなりや、今一息にて候ふ。」と慰めらるゝ言葉の露は、大方ならぬ情ぞかし。かゝる處にては、人の心も廣うなり、四海兄弟と思ひかはすも、淺間の神のあさからぬ靈德なるべし。息せはしき責苦に惱み、屏風が岩を眺めつゝよぢ登れば、頂をぬけ出でたる劍が峰の、

人やりならず

仰（あふぐ）

富士大宮、官幣大社、祭神木花咲耶姫命、山頂に奥院あり。

惱―腦

なほいや高きには、張りつめたる身もさすがに一太刀あてられたらんやうに腰うちぬかして休らふ。又餓鬼道の苦みを覺ゆれば、施餓鬼のぬしと強力を見かへりて、負ひたる包取るに島田ぬし(一)も同盟せまほしと頭のばさるれば、側なる雪を自然の飲料と、舌うちしつゝ、殘少きパンを四つにさき、罐詰を四分して、四人天下太平をうたひ、勢猛に登るに、讀賣新聞社の登山會一行の下るに出逢ひ、富士のいたゞきと共に名も高き野中ぬし(二)、氣象臺の和田ぬしに面を合はす。

やがて絶頂に着きぬ。銀明水を飲むに、雪よりも冷たし。是ぞ甘露ならぬ寒露と、七十五日ならで八十六日の命は

強力

(一)島田鈞一、第一高等學校教授、漢學者。

(二)野中至、富士觀象を以て著る、明治廿八年、劍ヶ峯の絶頂に氣象臺を建て、其の冬夫人と共に越年せんとせしかど極寒のため果さず。



慥に延びぬ。茶椀打ちふりて、少し後れられたる仲子ぬしを招き、駒ヶ嶽の上なる室に入り、金剛杖に頂上のしるしの印を受けなどす。三國一の甘酒をすゝり、頂上を廻らんと、室のうしろに出で、表に虎の畫、裏に都*良香の富士山の記を刻せる石碑を見つゝ、左に折るれば噴坑のふちなり。伏して望むに、聞きし程には物すごくもなし。岩石のさま變化極りなく、虎石など云へるは實に妙なり。深さは八十五間あまりなりとか。底の方すぼまりて、縞のやうに雪の淡くさゝとかゝれるけはひ、天上の客ならでは、いかでかかうと推しはかるべき。此處は、風立つ折は、はらばひてもなほ吹き落さるゝ恐あれば、いかゞ男々し

*平安朝時代の儒者、元慶三年卒す、年三十六。(八四四—八七九)

淡(あは)
泡(あわ)

く思ふとも、寄りつくべくもあらずとか。此の一行の幸多き事よと喜ぶ。噴坑のめぐりに聳えたる八つの峰の最も高きが劍が峰なり。

世の中はかぎり知られず、ふじの山、
登れば又も峰はありけり。

海面より一萬二千四百餘尺、われ天上せりと思ふも宜なり、人住む方は遙に見おろす雲の又下なるものを。

## 一五　富士の道芝（下）

登りし事なき世の人に、この絶勝を語るとも耳に響かん由なく、言葉は限りあれば、如何はせん。今更云ふまでもなけれど、苦みありて樂みありとは、誠にかゝるをぞ謂ふべき。

富士遠景　同山頂石室及び觀測所

野中氏の觀測所のほとりまで登り、其より内輪を廻らんと、山の雪を横ぎる。足袋までも通りていと冷たし。下れば賽の河原とて、少し平なる石の大小打ちまじりたる處に出づ。白山ヶ岳に、額や打ちあてんと、進むほどに、金明水といへるあり、これは少し臭氣ありて、銀明水

たゞずむ

辛うじて

のやうにはなし。久須志ヶ岳を登りつゝ廻れば、道見ゆ。此なん吉田口の登り詰なる。右に折れて伊豆ヶ岳の中腹を繞るに、總べて、石炭の燒け屑のやうなる砂なるに、こは赤みを帶びて熱氣さへあり、處々蒸氣のぼり、久しくたゞずめば、足に熱さを感ず。玉子など地中に埋め置けば二三十分にて煑ゆといふ。心地よくも覺えず。成就ヶ岳の頂も同じ。こゝに富士觀象臺あり。かくて辛うじて、銀明水の處に戻りぬ。三十六町なりとか。程こそ一里ばかりなれ、空氣の薄きに勞れての後なればいと遠き心地す。つく〴〵と考ふるに、男にてもこゝまで廻るは稀なりと云ふを、家に在りては、月に一度も外に出づる事なく、しかも車をかりてのみなるにと思へば、まこと、井の底の蛙の、一飛びに天上せるとやいふべき。何か記念をと思ふに、寫眞師の勸むれば、石室に休らひ居て、人も待ち合はせて、銀明水の後にて寫さす。

さすがに

いよ〳〵下るに、日盛りとなれば、氣候は寒けれど、空氣の薄き爲、日光の射る事强く、今朝の苦しさに比すべくはあらねど、吐胸をつきし渡なれば、足ふみもさすがに心易からず、下のみ見詰めつゝあれば、道の熱氣顏に照りて、頭痛くなりぬ。八合目にて雪をとり、手拭につゝみ鉢卷として、七合目に下る。こゝにて晝げものし、衣服も常のにぬぎかへ、あと一走りに走る心なれば、皆緩やかに休らふ程、

氷を頭に戴きて、しばし打臥すに快うなりはてつ。四時過ぐる頃、立ちて直立せりと見ゆる寶永山を一直線に下る、これなん須走と稱ふる。嘗て女には危しなど聞きつるが、こともおろかや、世にかばかり心ゆく業はあらじ。一夜のうちに、凡婦の身の仙化して天の羽衣や打ちかづけられしと撫でつゝ見れば、こはいかに、俗も俗、墮落のはての法界節めける我が姿に、通力や失せにけん、三十分もたゝぬまに、二合二勺迄落ち下りぬ。

晴れて候、又くもり候、富士日記。

（文法）動詞の第一段に續く助動詞　む‖　ず‖　ざり‖　じ‖　しむ‖

天の羽衣（あまのはごろも）

通力

（美角）

まほし‖　ましは凡ての動詞につゞく。

……寄りつくべくも　あらず。

……敢爲の　氣質を　修養せしむ。

る‖　すは四段・ラ行變格・ナ行變格の動詞につゞき、らる‖　さす‖は其の以外の動詞につゞく。

赤飯を　配らす。

風光の　美は　益、發揮せらる。

り‖は**サ**行變格の動詞に限りてつゞく。

先方は　承諾せり。

*東京の人、名は夏子、小說家、明治廿九年歿す、年二十五。

## 一六　人の新盆に

樋口一葉

待たぬ月日たつて早くも今年もいつの夢がら雲る春を大路を聞くやうにあ故中作

宮づかへたる提灯の蒼き色を見るにつけ林しき中のみ思ひ出でらるれば
涙許まとと思ひやられもはこぞ此の頃
るまぐ涙妹涙様おんやまひも出でぬ私屋
後の蓮池にはおりたち浮葉の露の玉ぬや
うなるをさぐり取らんと涙手を岸の小
松のかげ浮平さしのぐられもしに涙袂
より紅のはんけち落ちて水に浮び有様
など唯今ぬれるに覚えを今宵を門火よ
迎へられ涙魂祭の棚ぬ上にみぞ萩乃露ぬ



向られ路ふらんぬ思へ思へば只夢のやう
よ乃度ぬ多くもおはすまで唯二人なる
涙中あけられ涙晴まうそ目うちや
まーしへらせられを海う涙思出さま
ざまて慰めぐたいうせられ涙ん
ぐ涙思やまるとたなたなぐら有り
しなぐりの蓮の色一ぬと枯て色出ぬ
涙他へ乃ぬられぬ涙ばかたぐけなぬ涙籠な
る林梅は今朝はぬてもぎとりぬものに
乃度乃用ぐぬ涙流ぬ入れたくて

あぢきなや、蚊帳の裾ふむ、魂祭。　（蘇村）

## 一七　外國貿易

凡そ商業にて、國内に行はるゝ取引を内國商業といひ、國際間に行はるゝ交易を外國貿易といふ。現今我が國と通商條約を結べる國は、亞米利加合衆國・大不列顛・露西亞・和蘭・佛蘭西・葡萄牙・獨逸・瑞西・白耳義・伊太利・丁抹・瑞典・諾威・西班牙・澳地利洪牙利・支那・秘露・暹羅・墨西哥・伯剌西爾・亞爾然丁・希臘・智利・哥倫比亞等の諸國なり。

貨物の輸出又は輸入は開港場よりせざるべからず。我

班—斑
港=湊





が國の開港場は横濱・神戸・大阪・長崎・新潟・夷・函館・清水・武豐・名古屋・四日市・糸崎・下關・門司・博多・唐津・三池・口ノ津・三角・嚴原・佐須奈・鹿見・那覇・濱田・境・宮津・敦賀・七尾(南灣)・伏木・小樽・釧路・室蘭・大泊、及び基隆・淡水・安平・打狗・舊港・後壟・梧棲(塗葛窟)・鹿港・下胡口・東石港・東港・媽宮等にして、其の他特別の開港場として或る物品に限り輸出又は輸入を許されたる處あり、即ち若松・住之江・青森・根室等是なり。

開港場に於いて、貿易に從事するものには、賣込問屋と引取問屋とあり。賣込問屋とは、國内の荷主より委託を受けて、その貨物を商館に賣込むものをいひ、引取問屋とは、商館より貨物を引取りて、之を國内の商人に卸すものを

託—托

理—埋
註—注
送—贈

いふ。商館とは開港場に在る外人の商店をいひ、或は各自の本國にある會社・商會等の代理店たるあり、支店たるあり、或は獨立して營業せるあり。兎に角、本國の取引先と氣脈を通じて其の註文を受け、之を賣込問屋より買ひ調へて、本國に積み送り、又は我が引取問屋より註文を受けて、その貨物を本國より取寄する等の事を一般の營業となせるものなり。

斯くの如く其の間に外國商館を介することなくして、直接に海外と取引するを直輸といふ。直輸によるときは其の利益の極めて大いなるものあるにも拘らず、我が商人の進んで之を試みんとする者の甚だ少く、其の十中の



歎=嘆
革—皮

六七は、皆商館の手を經ざるなし。是我が商人の無學無能にして、海外の事情に通ぜざるに因れりとはいへ、その勇氣に乏しきこと誠に歎ずべきなり。

然れども明治初年以來の有樣を通觀するときは、貿易額逐年增加して、明治四十三年には輸出總額四億五千八百萬圓、輸入總額四億六千四百萬圓の巨額に上るに至れり。其の輸出品の主要なるものは、蠶絲・綿絲・羽二重・石炭・銅・茶・燐寸・絹手巾・麥稈眞田・地蔕・米・綿布・金巾・陶磁器・漆器・樟腦・錫等なり。その輸出先は米國を第一とし、支那・佛蘭西・英吉利・香港・印度・伊太利等之に亞ぐ。輸入品の重要なるものは棉花・砂糖・石油・機械類・鐵類・毛織物・豆類・麥粉・藥劑・染料・革

類・羊毛及び毛絲類・車輛及び船舶等なり。其の輸入元は英領印度を第一とし、英吉利・支那・米國・獨逸等之に亞ぐ。

凡そ國内にある商業家の一盛一衰は、之を一國全體の上より見て、強ち顧慮するに足らずと雖も、外國貿易に失敗したる國は、殆ど獨立國の體面を保つこと能はざるものなり。されば吾人は益〻努力して、其の發達を圖らざるべからず。

（補習教育實驗讀本による）

**〔文法〕** 動詞の第二（連用）段につゞく助動詞けり　つ　たり　けむ

たしは凡ての動詞につゞく。

……外國貿易に　失敗したり。

……登れば　又も　峯は　ありけり。





ぬは**ナ**行變格以外の動詞につゞく。

やがて　絶頂に　着きぬ。

きは此の段につゞけど、**カ**行變格及び**サ**行變格につゞく時は例外あり。即ち

こし　方を　回顧しき。

研究せしが　其の　効は　空しからざりき。

## 爲替と手形

遠國に金錢を送らんとするには、爲替の方法によるを便とす。又遠く旅行せんとするに當り、盜難等の恐ある時は、この方法により、行く先々にて必要の正金を得ば便利この上なかるべし。爲替には郵便爲替・電信爲替・銀行爲替の方法あり。郵便及び電信爲替は郵便局の取扱ふものにて其の振込まんとする金額を郵便局若しくはこれを取扱ふ郵便取扱所に振込むべし。郵便爲替は、爲替劵を受取りこれを先方に送附

し、先方にてはこれを其の地方の郵便局又は取扱所に持參して、記載金額を受取るものにして、電信爲替は、郵便局より直ちに受取人に通知して、其の金額を受取らしむるものなり。郵便爲替は五圓までを小爲替と稱し、其の料金參錢にて、取扱の手數も頗る簡易なり。それ以上は通常爲替と稱し、金額によりて料金も次第に增額せらるれども、最高額百圓につき僅かに四十二錢に過ぎず。電信爲替は拾圓までは三十錢にて、それ以上は次第に增額せらるゝものとす。急速の送金を要する場合にありては、これにまさる便法なし。郵便・電信爲替には居宅拂と稱する方法あり。これは局より直ちに受取人の居宅につきて拂ひ渡さるゝものにて極めて便利の方法なり。また銀行爲替は各銀行にて取扱ふものにて、其の手續は郵便爲替と大差なし。銀行爲替には、郵便・電信爲替の如く一回の送金額に制限なきがゆゑに、多額の送金をなすには極めて便利なり。以上の外通運便・貨幣封入便等の送金法あり。

手形には、爲替手形・約束手形及び小切手の三種あり。爲替手形は振出人(債權者)、支拂人(債務者)に對し、定まりたる期日に於いて手形面に記載





せる金額を手形の受取人又は其の指圖したるものに支拂ふべきことを命じ、正金の代りとして受取人に渡すべき證書にて、其の手形面には、(一)爲替手形たる事を示すべき文字、(二)所定の金額、(三)支拂人の氏名又は商號、(四)受取人の氏名又は商號、(五)單純なる支拂の委託、(六)振出の年月日、(七)一定の滿期日、(八)支拂地を明記するを要し、この要項を具備せざる手形は法律上無效のものと定めらる、注意せざるべからず。

約束手形は負債主より債主に宛て、或る期日の後、額面の金子を支拂ふべき旨を約束する證券にて、小切手は通貨を以て支拂をなすの手數を省かんが爲、發行するものにて、普通の場合は或る銀行に預金をなしおき、入用の都度小切手を發行してこれを引き出し、支拂の用に供するものとす。

總べて手形は、受取人自己の便宜によりて、更に他人に讓り渡し、これをして債權を行はしむるを得るものなれば、轉々融通せらるゝ時は、その效力貨幣に異なることなく、金融の圓滑を助け、商業の發達に資すること少からず。されば歐米諸國の活商業界にありては、其の取引に盛に

之を使用し、正金の授受をなすこと殆ど稀なりといふ。我が國においても、近來商業の發展に連れて、これを使用するもの漸く多く、從ひて各都市には商業與信所・手形交換所等の機關も設けらるゝに至れるは、實に悅ぶべき現象なり。されども一朝其の用法を誤り、不信の所行をなすが如きものあらば、小は一身一家の破滅より、延きては商界の恐慌を起すべきものなれば、其の取扱は商家の殊に愼重を要すべきこととなりとす。（公民讀本）

## 一八　夏の樂み

貝原益軒*

夏もやう〳〵深くなりぬれば、木として茂らざるはなく、草として榮えざるはなく、日々に物を引き延ぶるやうに見えて、一向に綠の色深き夏木立こそ花にもをさ〳〵劣るまじけれ。春の花はところ〴〵に咲きて稀なり。夏は、山も里も、有りとある草木毎にうちはへて皆綠の色なれば、春に異なる眺なり。種々に植ゑ集めてなづさひし前栽の草木ども、雨を帶びて各、その梢を顯し、所得顏に心に任せて生ひ茂れるも嬉しと見ゆ。昔覺ゆる花橘の薰れる夜は追風もいとなつかし。早苗取る頃、田家は雨を待ち得て忙はしく賑し。この頃、遣水の邊りに飛ぶ螢の音もせですだくを見れば、啼く蟲よりもいと憐むべし。夏山の氣色、靑み渡りたる高き峯大空に連なりて、雲の外に聳えたるを飽くまで見るこそ殊に勝れて心を快くする眺なれ。

水無月（みなづき）の頃になりぬれば、端居（はゐ）の風親しく、わらふだ（圓座）敷き

*筑前福岡藩の儒官名は篤信、博覽强記、好んで書を著す、正德四年歿す、年八十五。

て居るも快し。池の心深く、蓮葉の濁に染まずして、花なくて夕風に匂ひ渡るだにも異草に勝れてをかしきに、殊に花の笑みの唇開けたるは、所狹きまで薫り滿ちて、世に似たるものなく清らなり。涼を逐ひて木蔭にやすらひ、木々の下風のなつかしきに清き泉を掬び、夏を忘るゝ心地するも潔し。[一] 光明らけき夜半の月を清き水に宿して見るは更なり、遣水の音など聽くもいみじう心ゆくばかりなり。日頃經て暑さ堪へ難きに、夕立の一しきり渡りて名殘涼しきもいと快し。[二]（樂訓）

掬ぶ

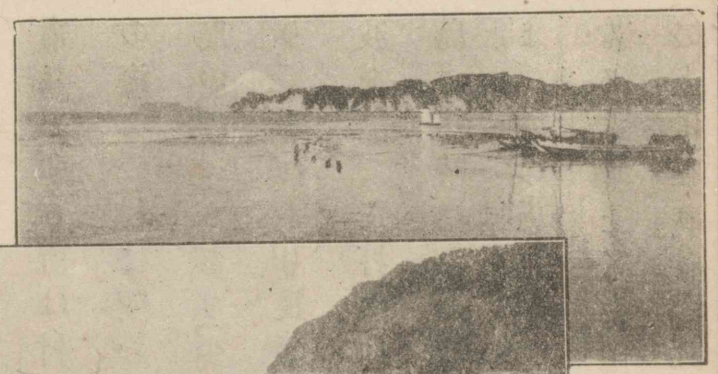
（一）教誡の書、三卷、著者八十一歳の時の作なり。

（二）卷二に出づ

## 一九　鎌倉の海

大和田建樹

今年も鎌倉に遊ぶ事二十日になりぬ。明暮友となりたる波の聲・山の姿・沙の色・貝の光、忘れんとしても忘られず。宿りとする所は材木座、光明寺の前、居ながらにして鎌倉の海を一目に望むべく、向ふには靈山崎につゞきて江の島の浮べるあり、少し右に離れて雲間に富士の聳ゆるあり。それより長谷の村里・由井の松原たゞ手に取る如く、波を隔てて打向はるゝも面白きに、南の方には伊豆の大島さへ晴れたる日には鯨の潮吹く心地して向ひたてるよ。左の方に隣して突き出でたる浦里は飯島とぞ呼ぶなる。朝とく起きて渚に出づれば、貝は打寄せられて砂の上に在り。薄紅にて花の如きもの、眞白にして鳥の如



材木座海岸

由井ヶ濱

きもの、帆立貝めきたるもの、月日貝らしきもの、濡れたる色こそ美しけれ。子供は走り寄りて拾はんとするに波は來りて拾はせじとすまふ。

磯に飜る赤旗は海の荒るゝを告げ、青旗は凪ぎたるを知らするなり。今日も青旗なりと喜ぶ子供は、潮浴びんとて勇むなるべし。朝げの煙こゝかしこに上りて、日影はやう〳〵我が許に來りぬ。白布の筒袖・麥藁の帽子、物の具はよし。いざ波とけふも戰はん。

戰疲れては、磯に上りて砂に臥し、砂に坐する亦樂し。子供は工兵となりて山を築けば、波また大擧し來りて一打に奪ひ去るも憎からず。

板を浮べて、雙の手に持てるは游がんとする人、手を引連れて舞踏しつゝあるは波を飛び越す人。世に物思なしとはかゝる境界にやあらん。見る人も見らるゝ人も、罪なく、欲なく、又憂なし。

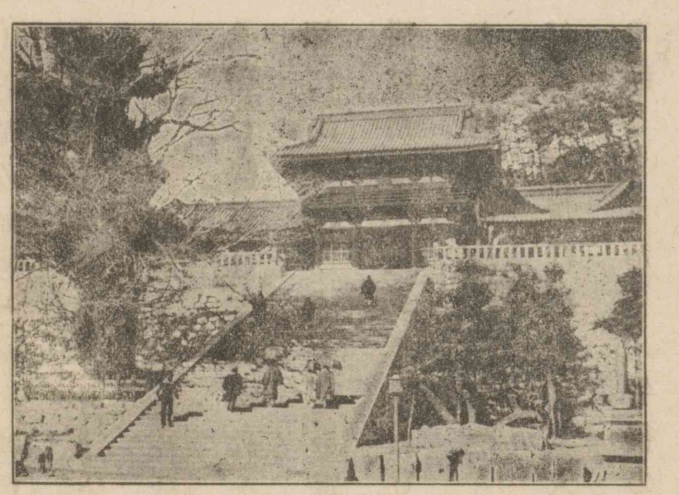
おのが生活は家こぞりて六人、自ら炊き自ら煮るをもて樂みとす。平生魚の價知らざる主人も、濱に出でては、イサキ・ベラなどいふもの提げ歸り、自ら庖刀取りて俎板に向ふ。鱗は逆さまに飛び、鰭は半ばちぎれたり。笑ふなよ、是も社會の一進歩なるを。

沖の片帆に殘りたる夕日も、いつしか影を收めて雲を染めたり。染められて立てる富士、忽ち紅に、忽ち紫に、忽ち黑く、忽ち薄く、終に姿を隱して止みぬ。天女の額か、造化の影か、抑、美の神の弄びけん筆か。

うしろの山は月になりぬ。數へ出さるゝ松の隙より、黃金の盃はきらめき登りぬ。波ところ〴〵白く光りて、やう〳〵に銀を散らし、又黃金を鏤め行く。







鶴岡八幡宮

夜も更けぬ。月を踏みて遠く歩けば、我が影あざやかに砂に在り。興に乘じてあくがるゝ人、我と影とのみならず、詩を吟ずる聲は彼處の岩の上にも起れり。

時としては、朝霧を分けて山路に遊ぶ折もあり。姉なる子は妹の手を引きて從ひ來りぬ。末の弟は父の肩を輿にしてにこ〳〵勇む。「いざ、

花のあらん限り集めて見ん。」といへば、姉と妹ははや遲れじと摘み始めたり。螢草・野菊・蚊屋釣草などを始めとし、名も知らぬ花さへ小さき手に餘りぬ。肩なる子の「あれよ〳〵。」と指さすを見れば、岸のひたひに咲きほこる姫百合、望は高けれど、屆かぬを如何にせん。

畑に出づれば、赤き毛を垂れたる玉蜀黍あり。綠の弓を掛けたる十六大角豆あり。此の中道を急ぐとなしにうねり行けば、穗に出でたる粟は頭打垂れて送り迎へす。けふは叔母樣、東京より入らせらるとて、子供ら朝早くより起きてさわぐ。午後の汽車は待ちつる人を乘せて停車場に着きぬ。やがて打連れ鶴ヶ岡にのぼる。今を盛りの池の蓮はかうばしき風を送りて、銀杏の下に佇む人を吹くも淸し。子供はあるじぶりして、此處彼處教へ巡りつゝ口々にいふ、「叔母樣明日は歸り給ふな。明後日も泊り給へ。」と。（雪月花）

磯づたひゆきてかへらん、江の島へ
一里はちかし、おぼろ夜の月。（落合直文）

〔文法〕動詞第三（終止）段につゞく助動詞　べし　まじ　らむ　らし
し　ゆりは**ラ**行變格に限り其の第四段につく。
鳴く蟲よりも　いと　憐むべし。
花にも　をさ〳〵　劣るまじ。
動詞の第四（連體）段につゞく助動詞なりは活用せぬ詞に添ふが

本體なり。
……聽くも　いみじう　心ゆくばかりなり。

## 二〇　舟路

島崎藤村*
長野縣の人、詩人、小說家。

海にして　ひゞく艫の聲、
水を擊つ　音のよきかな。
大ぞらに　雲はたゞよひ、
潮分けて　舟は行くなり。
しづかなる　空にすかして
波のいろの　靑きを見れば、





みなそこや　果も知られず、
ながれ藻の　浮きつ沈みつ。
みどりなす　草のかげより
湧き出づる　泉ならねど、
おのづから　滿ち來る汐は、
うなばらの　うちに溢れぬ。
さながらに　とほき白帆は、
むれをなす　まきばの羊、
吹きおくる　風に飼はれて、

わだつみの　野邊を行くらん。

雲行けば　舟もしたがひ、

舟行けば　雲もまた追ふ。

空と水　相合ふかなた、

もろともに　けふの泊りへ。

（一）藤村詩集

（二）作者の詩數十篇を集めたるもの、春陽堂發行。

（三）歌山の人、慶應義塾長、貴族院議員。

（三）近く、ペテログラードと改名せり。

## 二一　露國雜記

鎌田榮吉

### （一）聖彼得堡市街

伯林を發して聖彼得堡に向ふ。三十六時間の長途、汽車の窓より眺むるものは、茫漠として際限なき原野のみ。

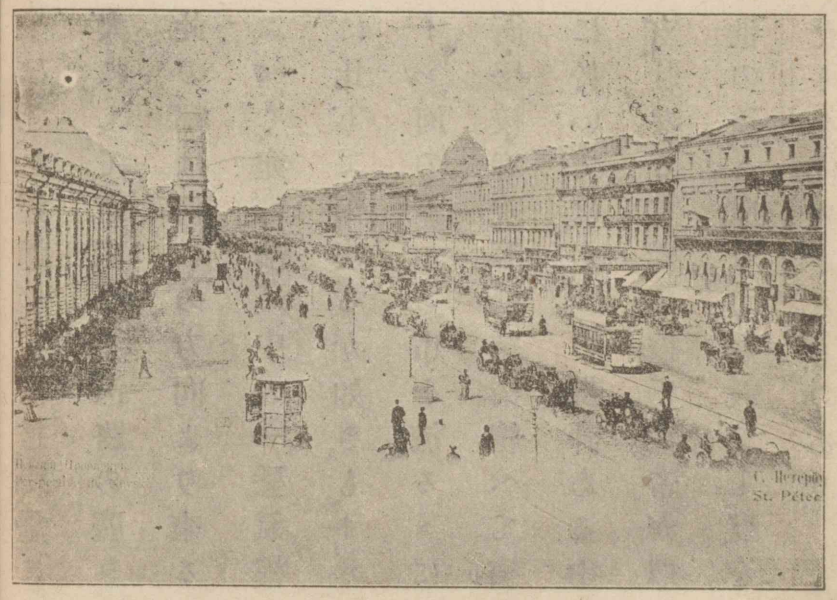
予は此を通過して聖彼得堡に入るや、先づ市街の規模宏大にして家屋高く、道路の廣き有樣に一驚を喫したり。此の都は何れの方向より來るも、同一の感覺を旅人に與ふべく、宛も沙漠中の一蜃氣樓に髣髴たり。道路は伯林に比して稍〻劣るが如きも、ネバ河の其の間を流るゝはライン河のケルン市を流るゝに似て一層大なり。宮殿・官衙・學校・寺院等は結構總べて宏大にして、美術建築上の點に於いては多少の批評ある由なれども、兎に角にも其の宏壯なる有樣は彼得大帝が單に當時の必要上よりも、萬世の後を慮りて建設せし狀を現して、自ら露國の大帝國たるを代表するものあり。

喫―潔

*普魯西ライン地方の都府、佛國へ通ずる要害地。

衙―衞

*諸神の主宰者、希臘神話に出づ。



ペテログラード府ネプスキー街

## (二)露帝の宮殿

露帝の冬期宮殿はネバ河に臨み、彼岸の取引所・砲臺・宗廟の大建築と相對し、前面には凱旋門上ジュピター*神六馬を御する銅像ありて、其の眺望頗る佳し。時恰も初冬の候、河水將に氷結せんとして未だ全く成らず、





(一)有名なる歷史畫家

(二)露國彼得三世の皇后、三世崩後帝位に卽く。(一七六二年—一七六六年)

薄氷片々流下するの景色亦頗る興あり。該宮殿は諸宮殿中の最大なるものにして結構極めて壯麗なり。

予は一日、ペトルホフ村の避暑宮を觀たり。建築甚だ粗野なりと雖も、室内の裝飾は美麗にして庭園頗る廣大なり。時既に冱寒にして樹葉梢を辭し、更に園景の賞すべきものなかりしも、フィンランド灣の沿岸にして滿面蒼海に臨むを以て、夏季の觀望蓋し佳なるべし。彼得大帝茲に宮を建ててクロンスダットの往復に屢足を止め、又佛人(一)レブロンを聘して離宮を築き、續いてカサリン(二)后之を增飾し、爾來歷代の皇帝之を愛して今日に至れるものなりと云ふ。

對＝対

ネバ河の對岸ペテロスキーは、彼得大帝が最初此の地に着して開市を謀りし時に住居せし處なり。極めて質素なる小屋の設ありて、其の一室に大帝の靈を祭る。衆人茲に來りて蠟燭を求め、燈明を捧げて禮拜す。僧侶出で來りて祈禱すれば、衆亦之に和して冥助を祈る。素朴なる二三の室には、帝の自作に係る耶蘇の十字架に懸けられたる肖像等あり。歩を轉じて夏公園に到る。園中には波蘭土より奪ひ來れる白石肖像を點々散置し、凌寒の小屋掛をなして一々之を覆ふ。園の一隅に彼得大帝の居室あり、これ亦素朴にして宮と云はんよりは寧ろ家と稱するが適當なるべし。暗室あり、卽ち牢獄にして、大臣

*波蘭土＝洲の舊王國、西暦一七九年、露・普・墺三國のために分割せらる。

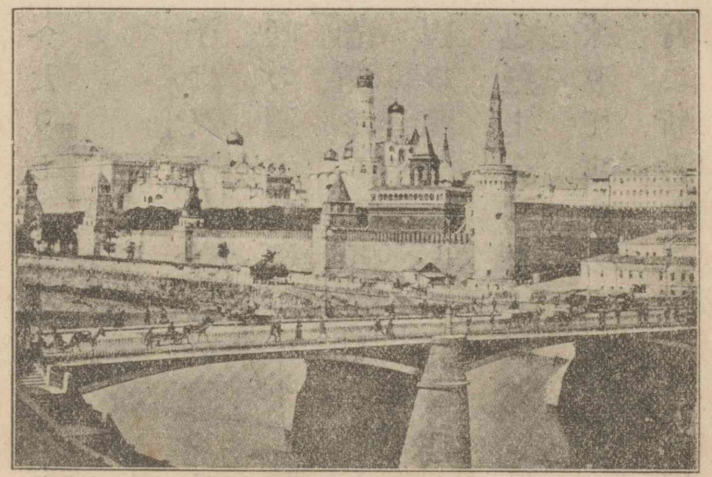


等罪あるときは此に幽し、時に或は曳き出して鐵棒を加へたりしものなりと云ふ。

(三)舊都莫斯科

予は又聖彼得堡を發して莫斯科府に到る。其の間四百哩の鐵道は僅かに十三時間を以て走れり。其の間また茫漠たる原野にして絶えて人家を見ず。莫斯科府は露國の舊都にして其のクレムリン宮は六百年間の歷史を包羅し、金塔林立極めて壯麗なり。露帝戴冠の時、此處に來りて宮中の敎堂アッサンプションに於いて其の式を行ふ。宮に新古の二殿あり、新殿は純然たる歐風なれども、古殿は稍東洋流にして、之を印度ロンバルヂイ風の建築と稱

す。古雅にして面白し。宮中に貴賓の寢室數十あり。此の區域は露人の縱覽を許さざれども、予等は外人たる故を以て、入りて觀ることを得たり。畫廊にかゝげたる種々の名畫の内にヨワン大王通行の行列圖あり。人民が路傍に群集土下座して拜する有樣の如きは、露國の古俗、東洋に類するを見るに足れり。



クレムリン宮殿





莫斯科府の郊外一里餘の處に一大丘あり、雀が丘と稱す。一千八百十二年、佛軍の莫斯科府に攻め入りし時、奈翁此の丘上より全市を眺望し、冷然として曰はく、「此の莫斯科を露人の手に委ねおくは誠に惜しむべきことなり。」と。予、雪中橇を驅りて之に登り、遙に市街を眺望するに、白雪皚々として北風衣を吹き、沍寒骨に徹す。又市の一端に韃靼街あり、韃靼人の居住する所なり。皆回教を奉ず。回教堂あり、之に入りて一見するに、履を脱すべく、帽を脱すべからず。堂前石柱鐵針を頂くあり、これ古風なる日時計なり。案内の一僧に錢を與ふれども、之を否みて受げず、教禁を守るなるべし。

(四)波蘭の遺跡

汽車、莫斯科府を發して殆ど二十時間にしてワルシャウ市に達す。同市はもと波蘭の首府なりしが、分割亡滅の後露に屬し、露國總督府の所在地となる。舊波蘭王の冬期宮は今總督の官宅に充てらる。其の他宮殿・寺院等に見る所悉く亡國を弔ふの情なき能はず。市の一方に猶太人街あり、猶太人十五萬人此に居住し、男女共に特殊の風俗を爲せり。其の教堂シネゴックに入れば、正面に祭る舊約全書の數卷を以てし、皆ヘブライ語を以て之を記す。机上に並ぶる舊約全書の大册も亦筆寫に成り、横面にモーセの顔面を畫がけり。堂内帽を脱せざるを禮と

(一)ヘブライ人の用語ヘブライ人は猶太人なり。

(二)ヘブライの立法家(前一五七一年—一四五一年)





す。市の中央に一大碑柱あり、之を賣國碑と稱す。露國に通じて國を賣りし三將軍の記念碑なり。又初めて地動說を唱へし天文學者波人コーペルニカスの銅像あり。史家の說に、波蘭の滅亡は三强國の貪婪飽くを知らざるに因ると雖も、一は其の國の獨立を維持すべき中等社會の存在なくして、貴族は飽食暖衣に安んじ、下民は衣食に汲々として、共に護國の精神に乏しかりしが爲なりといふ。(「歐米漫遊雜記」による)

〔文法〕動詞の第五段につゞく助動詞りは四段活用の動詞にのみ添ふ。

…汽車は僅かに十三時間を以て走れり。

(一)西一四七三年—一五四三年

雖＝虽

(二)著者が明治廿九年歐米諸國を漫遊せし時の雜記、博文館發行。

助動詞相互の接續　動詞に一助動詞の連續したるのみにて意義完全せざる時、更に他の助動詞の之に連續することあり。その方法概ね動詞と助動詞との連續する方法に準ず。

得らるべき　利益を　失はざるべからざること

あるべし。

## 活版

芳賀矢一*

近來、印刷の術、驚くべき進歩をなして、毎時間一萬餘枚を刷り上ぐるは、容易なる事となれり。而してこれに用ふる活字は、すべて鑄物にて、地金は鉛百匁・安質母尼(アンチモニー)十五匁・錫四匁・銅一匁の合金なり。これを鑄物型の中に流して活字とす。機械仕掛にて、一時間に四號活字一千箇を鑄造すべし。

活字は大小によりて、初號より八號までの號あり。現今印刷物に最も多く用ふるは五號にして、六號・四號・二號これに次ぎ、初號・八號は殆ど用

前に出づ。



ひず。活版所にては用ふること多きもの程、多數に備へ置くを常とす。

**初壹貳參四五六七**

又字體によりて、明朝・清朝・隷書・ゴヂック等の稱あり。この内、明朝最も多く用ひらる。この他、數字記號・約物(やくもの)・圈點・導線・連語線・語學記號・發音記號・度量衡記號・界線・罫線・花型(はながた)等皆入用なり。

| | |
|---|---|
| ＋ － × ÷ √ ＜ ＞ ∠ ∵ ∴ ± | 數字記號 |
| 「 『 （ （（ 〔 | 約物 |
| ● ○ ◎ 、 。 | 圈點 |
| ……… | 導線 |
| ‖‖‖ | 連語線 |
| “ ” ： ； ？ | 語學記號 |
| ） ～ 〃 ， 人 | 發音記號 |
| $ ℔ ㎏ ㎏ ％ | 度量衡記號 |

## 明朝・清朝・隷書・ゴヂック

又、込め物として、字と字との間を明くるために用ふるものあり。行と行とを明くるには、インテルとして、長きものを用ふ。これらには、厚薄數種あり。

數萬の活字は、號數及び書體によりて大別し、同號同體の漢字は、漢字字引の順によりて箱別に入れ置き、假名は五

十音順に入れ置く。これを組むには、まづ活字を拾ふ職工卽ち文選工は、原稿を手にして、これを讀みながら、所要の文字を一つづつ彼の箱より拾ひ出すなり。されど、斯くては廣き文選場を往復して搜索するに、時間と勞力とを徒費する事多きが故に、所謂利字の箱を備へ、これにて大部分の文字を拾ひ取るを通例とす。漢字の總數は三萬に餘り、その中普通に用ふるもの四千ありといへど、最も屢用ひらるゝ字は八百五十位に過ぎず。されば、之を一箇の箱に入れ置けば、七分通りはこの箱だけにて拾ひ得べしといふ。この箱の中にても、一等の利字は何々、二等のは何々と等別して並べたれば、熟練せる職工は之れを拾ひ上ぐること極めて速し。

文選工既に所要の文字を拾ひ了ふれば、これを植字工に渡す。植字工は原稿と對照して込め物・ふり假名等を用意し、註文通りに枠に組む。組むに最も骨の折るゝは、表の類、次はルビ*の多きものとす。

さて、組版成れば、これを印刷する前に、各面一枚だけ下刷して、文字の誤植、字の不體裁などを直す。之を校正又は校合といふ。印刷物の種類

*七號振假名



により、再校・三校、時としては六七校に及ぶことあり。斯くて後始めて本印刷に取掛るなり。

活字の地金は鉛なるが故に一萬枚も印刷すれば、字面磨滅して不鮮明となる。この磨滅を防ぎ、且多數の活字を一書の印刷に停滯せしめざる目的にて、紙型鉛版といふもの輓近發明せられ、今盛に行はる。

こは校正を終へたる時、その版面を清く洗ひ、その上に合紙といふ濕紙を載せ、其の上より打刷毛にて叮嚀に打ち込み、この上に普通の紙を張りて厚くし、乾燥室に入れて乾かし、原版より離せば、反對の凹版を得べし、之を紙型と稱す。凹版に活字の地金を流し込めば、原の活版と少しも違はざる鉛版を得べし。この紙型をだに保存し置かば、鉛版は何時にても直ちに調製し得べく、再版・三版などの手數を減ずるを得べし。

その他、急ぎの印刷の時には同一の鉛版四五枚を造り、四五臺の機械にかけて、一時に刷る便利あり。又輪轉機の圓筒形の鉛版を作るにも紙型の法は必要にして缺くべからず、この上なき發明といふべし。紙型了れば、原版は用無きが故に、一度洗ひて解きほぐし、活字・込め物などそ

れぞれもとの處に藏め置くなり、これを解版といふ。（修訂帝國女子讀本）

## 二二　税所敦子君の棺前に誄す

高崎正風

嗚呼、税所刀自逝きぬ。わが無二の友たりし掌侍正五位税所敦子君[二]逝きぬ。忠孝慈貞なりし君が前半世の行狀は鹿兒島士民の普く知る所、その後半世の名譽は輦轂の下にかくれなし。然れども、前後に通じて、よくこれを知悉せるは蓋し正風ならん。正風が歌によりて始めて君と相見えしは、君が齡三十に垂んとせし時にして、正風が歲十九の頃なりき。相見しは歌によると雖も、仰ぎ慕ひしは君が高節によれり。

（一）舊鹿兒島藩士、樞密院顧問官兼御歌所長、明治四十五年歿す、年七十七。

（二）明治三十三年二月歿す、年七十六。

幕一幕

君は正風と藩を同じくして京都に勤務せし税所篤之氏が繼室となり、嬰兒を懷にして、不幸にも夫に訣れたり。

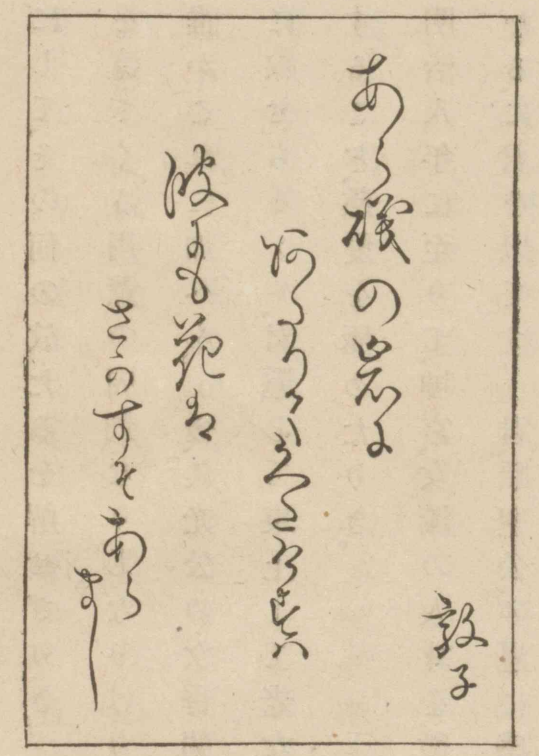
税所敦子

嗚呼、君は京都に生れ、京都に成長し、京都に結婚せし優美艶麗なる婦人なりき。當時、鹿兒島の風習たるや、同鄕人の外は他所者として、これを賤しみ、その姑のごときも、京女の新に來りて同居することを快しとせざりしにもかゝはらず、君は正當の理に循ひ、自ら奮ひて遼遠殆ど

外國の想ある鹿兒島に歸りて、その姑に事へき。嗚呼、尋常の女子ならんか、夫の携へ歸らんとするも、猶、難色あらん、否、離婚をも乞ふなるべし。君が己に克つ勇氣に富み、志操の秀拔なりしことは、これを以ても知らる。況や、京都より齎しし衣服・調度の美なるものは、擧げて之を、前妻の出にして鹿兒島に在りし女に與へ、身には粗敝を纏ひ、日夜、老いたる姑を看護し、その酒を嗜むを見て、手づから下物を調理して口腹に適せしめしかば、曾て君と同居するをだに厭ひ嫌ひたりし姑は、いまだ月を累ねずして、忽ち君を杖柱とも憑むに至れり。

國君順聖院公*これを聞き、拔擢して世子の保傅とし、親しく君が行爲を觀察して、大いに喜びて曰はく、「われ人を得たり。」と。世子天す。君悲歎に堪へず、自刄して殉せんとす。姑取縋りて泣きて曰はく、「われ、今、御身を失はば、何を樂しみてか、この世に生きの殘るべき。」と。君、これがために止りぬ。

*島津齊彬、鹿兒島藩主、安政五年歿す、年五十。



正風、嘗て君に就きて歌談を聞く。訪ふ毎に、一婢ありて

君が傍を離れず。又、正風が詠草を返付せらるゝ毎に、必ず正風が母若しくは姉にあてて送らる。當時、正風迂疎にして、その何の故たるを解せざりき。後に思へば、嫌疑を遠ざくる用意の周到なりしなりけり。嗚呼、忠孝慈貞、誰かこれに加へん。後、久光公の女香蘭夫人、近衛忠房公に嫁せらるゝや、君扈して東上して老女となり、下僚を遇すること、慈愛を極めたりき。

明治八年に至りて、坤宮、女流の人才を徵し給ふ。正風薦むるに君を以てす。君、順聖公の恩に感激し、近衛家を去るに忍びず、正風説くに大義名分を以てして、君始めて命を奉ぜり。爾來、兩陛下御文學の諸務を掌り、御製・御歌の

(一) 彬の弟、明治の初、左大臣たり。明治二十年歿す、年六十一。
(二) 關白忠凞の子。



拜寫を始め、同僚官女の爲に百事の質疑に應ずるまで、日夜、安息に暇あらず。君もと蒲柳の質、しかも、公事に服しては毫も攝養を意とせず。往年、大いに病む所ありき。天皇陛下、君が年老いて勤勉の過度なるを憐み、家居して適意に出仕せしめんとしたまひ、特に正風をして內旨を傳へしめ給ひしが、君安んずること能はず、平素厭嫌せし牛乳を服して、氣を養ひ、癒ゆるに及びて、宮中に入り、鞅掌すること故の如し。

嗚呼、君が八百年以來、唯一人の女文豪たりしことは、世人皆これを知る。君夙く三寶に歸依して、慈善を好むこと飲食よりも甚だしく、わが彰善會の起るや、最も熱心なる

贊成者として金員を附せらるゝこと屢なりき。君、去んぬる一月五日、正風が病牀を問ひて、告げて曰はく、「明年七十七、謂はゆる喜字の齡だらんとす。いさゝか自ら壽すべし。」と。正風大いにこれを贊し、爲に盛大の宴を張り、朝野の詞藻を蒐集せんと期したりしを、今はつひに全く畫餅となりぬ。正風、今、かくの如く忠孝慈貞なりし無二の友を喪ひ、身病褥に横たはりて、葬場に會するをだに得ざるは、何らの慘ぞ、何等の痛ぞ、豈慟哭せざるを得んや。病を力めて、此の誄を草し、兒元彦をして代讀せしむ。嗚呼悲しきかな。

贊＝賛

*海軍少佐、日露戰役に戰歿す。





嚴島、あかつき潮やみちくらし、
わた殿こえて千鳥なくなり。

（敎子）

〔文法〕 品詞の相轉

暮れの鐘。明けの空。……（轉來の名詞）
わらはは　御身を　姉上と　仰ぎ居候。…（轉來の代名詞）
組合員　年々　增加せり。……（轉來の副詞）

## 二三　國體の精華

佐々木高行*

邦域異ならんには、風氣も亦自ら異なるべく、風氣異ならんには、政體も亦隨ひて異なるべし。これ勢の止むべからざる理なり。されば、宇内に國を立つるもの、其の政體各〻さま〴〵にして、一樣ならざることは固より言を俟た

*舊高知藩士、參議工部卿等に任じ、後樞密院顧問官、常宮・周宮御養育主任たり、侯爵、明治四十三年歿ず、年八十一。

ざるも、今その大要を取總べていはば、立君の國と民主の國との二つを出でざるべし。而して、立君の政、必ずしも民主の治に劣れりとせず、民主の治、必ずしも立君の政に優れりとせず。故に、立君の政をもて民主の治に代ふべからず、民主の治をもて、立君の政に代ふべからず。たゞその建國の體を顧み、その本と末とをよく照し合はせて、後々の國是を計らんこそ必要なるべけれ。

按ふに、民主の治にして純粋なるものは、かの合衆國なるべく、立君の政にして至醇なるものは、我が大日本帝國なるべし。

まして、我が帝國の君位は、其の基するところ甚だ遠く、下よりおし戴きまつりて卽け奉れるにあらぬを

や。はじめ、皇祖、その皇孫に此の國を委ねて宣りたまはく、「この豐葦原の中津國は、我が子孫のつぎ〳〵知らさん國なり。」と、また神器を授けて宣り給はく、「これを視ること、なほ我が前に齋くが如く、同床共殿にして仕へまつるべし。天津日嗣の隆ならんこと、天壤と窮りなからん。」と宣り給へり。あゝ、我が皇統の淵源と帝業の基礎とは全くこの大詔に於いて定まれるなり。

斯くおごそかに統を垂れ極を立て給ひたれば、神武天皇高御座に卽かせ給ひし以來も、既に御代は百二十餘代、年は二千五百餘年の久しきに及び、一系の皇統は、連綿として絶ゆる時なく、君臣の秩序は井然として紊れしことな

し。げに皇祖の大詔は、ことば約に、旨廣く、萬古不易なるものになん。

こゝをもて、先帝は、明治の二十二年に帝國憲法を發布せさせたまひて、皇祖皇宗の遺訓をついで、「大日本帝國は、萬世一系の天皇之を統治す。」とぞ宣給ひける。この古今一貫なる歴史の精粋は、高く聳えて芙蓉峰と顯れ、廣く湛ひて琵琶湖と彰れたり。恩澤上に積み、士氣下に振ひ、未だ嘗て一度も外辱を受けしことなし。あゝ盛なるかな。これ誠に世界無比の國體なるが故にこそ。

抑、源泉清からざれば、百里の長流もつひに澄むべき期なし。砂上に金殿玉樓を構へんよりも、巖上に茅屋竹椽を





築かんこそ、堅牢にして安穩ならめ。智をもて王たるものは、一旦その智失すれば、則ちその身も亦亡びん。力をもて國を立つるものは、一朝その力衰ふれば、やがて其の國も亦衰へん。あゝ、是等の狀態は萬國史乘に於いて常に散見する所ならずや。古賢曰はく、「盡く書を信ぜば書無きに如かず。」と。史を讀まんもの、眼識を尚ぶこと既に久し。我を明らかにして彼を顧みば、國體の精華それ孰れをか優れりとせん。

*孟子盡心篇に出づ

〔文法〕同語の重なりて一語となれるものを疊語といふ。

其の政體　各、さま〴〵にして、一樣ならざる……。

人々　さすがに　吐胸を　つきぬ。

相異なる二箇以上の品詞の相合して一語と作れるものを熟語といふ。

政體。國是。夏木立。他者（よそもの）。明らかにす。

1 2 3

單獨に用ひられざるものにて、他の語の頭又は尾に附きて一つの品詞を成す者を接頭語又は接尾語といふ。其の添へるものはなほ單語なり。

4 5

み（御）代。ま（眞）心。はつ（初）物。吾ら（等）。面白み。高さ。時め く。横たはる。女らし。

6 7 8

大正女學讀本 實科四箇年用 卷五 終

文法一覽表

振替口座東京八一五番

品詞を成す者を接頭語又は接尾語といふ。其の添へるものはなほ單語なり。

み(御)代。ま(眞)心。はつ(初)物。吾ら(等)。面白み。高さ。時め く。横たはる。女らし。

大正女學讀本 實科四箇年用 卷五 終



# 文法一覽表

**形容詞の法** 直說法(連用・終止・連體) 前提法(順逆・假定・確定) 命令法

**助動詞の法** 動詞・形容詞の一に準ず。

**用言と助詞との接續**

- 疑問・感歎
  - や (用言の第三段に)
  - か (同 第四段に)
  - 共に文を結ぶ。
- 禁止
  - な (第三段に)(ラ變は第四段に)
  - なーそ (動詞の第二段と カ・サ變の第一段とを挾む。)
- 併發・反覆
  - つ (第二段に)
  - ながら (第四段に)
- 逆接
  - を
  - に
  - も
  - が (第四段に)
- 接續
  - ば (動詞の第一段・第五段に、形容詞の第二段に)
  - とも (動詞の第三段・形容詞の第二段に)
  - ど
  - ども (第五段に)

助動詞との接續も之に準ず。

**動詞と助動詞との接續**

- 第一段に續くもの
  - ず
  - む
  - す (四段・ナラ變)
  - ましし
  - しむ
  - らる
  - まほし (動詞全體)
  - さす (上・下一段・カ・サ變)
  - り (サ變)
- 第二段に續くもの
  - けり
  - つ
  - ぬ (ナ變以外の動詞)
  - つ
  - たり
  - けむ
  - たし (動詞全體)
- 第三段に續くもの
  - べし
  - まし
  - ましし
  - らむ
  - らし
  - めり
  - なり
  - ラ變は第四段につく)
  - さ (カ・サ變に例外ふり)
- 第四段に續くもの
  - なり
- 第五段に續くもの
  - り (四段)

助動詞相互の關係 概ね動詞と助動詞との接續法に同じ。

品詞の相轉 轉來の名詞 代名詞 動詞 形容詞 副詞 接續詞 動詞

語の構成 疊話 熟語 接頭語 接尾語

大正四年二月十六日
高等女學校國語科教科書
文部省檢定濟

不許複製

著作者印
本峰曆
大正三年十一月二十五日印刷
大正三年十一月二十八日發行
大正四年二月十九日訂正再版印刷
大正四年二月十日訂正再版發行
大正五年三月二十五日第四版發行

| 定價 | 大正ヶ女年讀用 |
|---|---|
| 一、冊二錢 | 五、冊一錢 |
| 三、冊十錢 | 六、冊一錢 |
| 四、冊一錢 | 八、冊一錢 |

| 大正九年度定價 | 嘉時 |
|---|---|
| 一、五十四錢 | 五、五十三錢 |
| 二、五十一錢 | 六、五十三錢 |
| 三、五十六錢 | 七、五十三錢 |
| 四、五十三錢 | 八、五十三錢 |

著作者　三矢重松
著作者　畠山健
著作者　峯間信吉
著作者　辻本卯藏
發行兼印刷者　東京市神田區北神保町十一番地
印刷所　東洋印刷株式會社　東京市芝區愛宕町三丁目二番地

發行所　東京市神田區北神保町
電話本局三四三二番
振替口座東京八一五番
弘道館

吉田町技ゞけいい女學校本二高橋すゑ子